

商代後期の社会・文化とその変化

宮本, 一夫

九州大学アジア・オセアニア研究教育機構文化変動クラスター文化遺産モジュール長

荆, 志淳

ブリティッシュ・コロンビア大学人類学系 : 教授

唐, 際根

南方科技大学 : 教授

何, 毓靈

中国社会科学院考古研究所 : 研究員

他

<https://hdl.handle.net/2324/4773124>

出版情報 : 2022-03-20. 九州大学アジア・オセアニア研究教育機構

バージョン :

権利関係 :



商代後期の社会・文化とその変化



商代晚期的社会、文化及其变迁



公開講演会『商代後期の社会・文化とその変化』プログラム

日時 2022年3月20日(日)

場所 Zoom ウェビナーによるオンライン開催(日中逐語訳付き)

主催 九州大学アジア・オセアニア研究教育機構文化変動クラスター文化遺産モジュール
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

協力 九州大学アジア遠隔医療開発センター(TEMDEC)

司会 溝口孝司(九州大学大学院比較社会文化研究院教授)

10:00-10:10(日本時間)

挨拶:宮本一夫(九州大学アジア・オセアニア研究教育機構文化変動クラスター文化遺産モジュール長)

10:10-11:10(日本時間)

荆志淳(ブリティッシュ・コロンビア大学人類学系教授)「殷商文明における物質使用」

11:10-12:10(日本時間)

唐際根(南方科技大学教授)「殷墟商末周初期の遺構の識別と研究」

13:00-14:00(日本時間)

何毓靈(中国社会科学院考古研究所研究員)「涇北商城工房遺跡の発掘とその収穫」

14:00-15:00(日本時間)

岳洪彬(中国社会科学院考古研究所研究員)「殷墟小屯宮殿宗廟区の考古新発見と研究の新展開」

15:10-16:10(日本時間)

牛世山(中国社会科学院考古研究所研究員)「殷墟商代王陵区周辺の考古新収穫」

16:10-17:10(日本時間)

岳占偉(中国社会科学院考古研究所研究員、殷墟博物館副館長)「殷墟白陶紋様の製作技術」

17:10-18:10(日本時間)

内田純子(台湾中央研究院歴史語言研究所副研究員)・溝口孝司「王墓からみた商代後期王権と社会変動」

公开研讨会 商代晚期的社会、文化及其变迁 会议日程

日期 2022年3月20日(日)

地点 Zoom线上会议(附中日译文)

主办单位 九州大学亚洲-大洋洲研究教育机构文化变动部门文化遗产课题组
九州大学亚洲埋藏文化财研究中心

协办单位 九州大学医院国际医疗部亚洲远隔医疗开发中心(TEMDEC)

主持人 溝口孝司(九州大学大学院比较社会文化研究院教授)

9:00-9:10(北京时间)

致辞: 宮本一夫(九州大学亚洲-大洋洲研究教育机构文化变动部门文化遗产课题组长)

9:10-10:10(北京时间)

荆志淳(加拿大英属哥伦比亚大学人类学系东亚考古加拿大研究讲座教授) 殷商文明的物质实践

10:10-11:10(北京时间)

唐际根(南方科技大学教授) 殷墟商末周初遗存的辨认与研究

12:00-13:00(北京时间)

何毓灵(中国社会科学院考古研究所研究员) 洹北商城作坊遗址的发掘与收获

13:00-14:00(北京时间)

岳洪彬(中国社会科学院考古研究所研究员) 殷墟小屯宫殿宗庙区考古新发现和研究新进展

14:10-15:10(北京时间)

牛世山(中国社会科学院考古研究所研究员) 殷墟商王陵区周边考古新收获

15:10-16:10(北京时间)

岳占伟(中国社会科学院考古研究所研究员,殷墟博物馆副馆长) 殷墟白陶纹饰的制作工艺

16:10-17:10(北京时间)

内田純子(台湾中央研究院历史语言研究所副研究员)·溝口孝司 从王墓来看商代晚期的王权以及社会变动

商代後期の社会・文化とその変化

目次

はじめに	1
宮本一夫 (九州大学アジア・オセアニア研究教育機構文化変動クラスター文化遺産モジュール長)	
1 殷商文明における物質使用	3
荆志淳 (ブリティッシュ・コロンビア大学人類学系教授)	
2 殷墟商末周初期の遺構の識別と研究	5
唐際根 (南方科技大学教授)	
3 洹北商城工房遺跡の発掘とその収穫	7
何毓靈 (中国社会科学院考古研究所研究員)	
4 殷墟小屯宮殿宗廟区の考古新発見と研究の新展開	21
岳洪彬 (中国社会科学院考古研究所研究員)	
5 殷墟商代王陵区周辺の考古新収穫	28
牛世山 (中国社会科学院考古研究所研究員)	
6 殷墟白陶紋様の製作技術	34
岳占偉 (中国社会科学院考古研究所研究員、殷墟博物館副館長)	
7 王墓からみた商代後期王権と社会変動	42
内田純子 (台湾中央研究院歴史語言研究所副研究員) 溝口孝司 (九州大学大学院比較社会文化研究院教授)	

商代晚期的社会、文化及其变迁

目录

前言	2
宫本一夫（九州大学亚洲-大洋洲研究教育机构文化变动部门文化遗产课题组长）	
1 殷商文明的物质实践	4
荆志淳（加拿大英属哥伦比亚大学人类学系东亚考古加拿大研究讲座教授）	
2 殷墟商末周初遗存的辨认与研究	6
唐际根（南方科技大学教授）	
3 洹北商城作坊遗址的发掘与收获	14
何毓灵（中国社会科学院考古研究所研究员）	
4 殷墟小屯宫殿宗庙区考古新发现和研究新进展	25
岳洪彬（中国社会科学院考古研究所研究员）	
5 殷墟商王陵区周边考古新收获	31
牛世山（中国社会科学院考古研究所研究员）	
6 殷墟白陶纹饰的制作工艺	38
岳占伟（中国社会科学院考古研究所研究员，殷墟博物馆副馆长）	
7 从王墓来看商代晚期的王权以及社会变动	49
内田純子（台湾中央研究院歷史語言研究所副研究員）	
溝口孝司（九州大学大学院比较社会文化研究院教授）	

はじめに

宮本一夫

(九州大学アジア・オセアニア研究教育機構文化変動クラスター文化遺産モジュール長)

2019年に設立された九州大学アジア・オセアニア研究教育機構には、6つのクラスターがあるが、その一つが文化変動クラスターである。文化変動クラスターは三つのモジュールから成り立ち、その一つが文化遺産モジュールである。文化遺産モジュールは、「文化遺産や文化財の保護への提言を行うために、環境変動史・災害史研究と人類史研究を融合させた新学術分野の創成を試みるとともに、文物・文化財をめぐる文化的・政治的・経済的諸問題を解決する」ことを目的としている。

2020年3月に、九州大学アジア・オセアニア研究教育機構とは別に、中国社会科学院考古研究所と台湾中央研究院歴史語言研究所の研究者を九州大学に招聘し、殷墟関係のシンポジウムを開催する予定になっていた。あいにく、その年の1月に始まる新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、招聘がかなわないこととなった。そこで、翌年には文化変動クラスターの予算を使い、再度招聘することを計画していた。しかしながら、これも感染症の拡大予防のため延期となり、2021年度に再度の招聘を試みた。しかし、2021年度の日国内における第5波ならびに第6波の新型コロナウイルス感染症の拡大に鑑み、招聘に代わってオンラインでの講演会開催を行うこととした。

九州大学アジア埋蔵文化財研究センターの溝口孝司センター長と台湾中央研究院歴史語言研究所内田純子研究員を中心に、講演会の人選をお願いした。その結果、このお二人を含め、中国社会科学院考古研究所から岳占偉殷墟博物館副館長を始めとする4名の研究者、南方科技大学の唐際根教授、ブリテッシュ・コロンビア大学の荆志淳教授の8名の方々によるオンライン講演会の開催が可能になった。

本講演会は、紀元前13～11世紀に東アジアの古代文明の中心であった殷代後期の殷墟という都市遺跡の発展と衰退を、最新の調査成果をもとに、社会組織の変化と環境変動との関係から議論するものである。殷墟という世界的な文化遺産を、考古学的にあるいは人類学的にその意義を検討し、その保護と顕彰に役立つとすれば、本モジュールの活動にふさわしいものとなろう。

序言

宫本一夫

(九州大学亚洲-大洋洲研究教育机构文化变动部门文化遗产课题组长)

九州大学亚洲-大洋洲研究与教育机构成立于 2019 年，有六个部门，其中之一是文化变动部门。文化变动部门由三个课题组组成，其中之一是文化遗产课题组。文化遗产课题组的创建目的明确，即为了对文化遗产与文化财保护提出切实可行的意见，在尝试将环境变化史、灾害史研究与人类史研究进行融合形成新的学术领域的前提下，解决与文化财相关的文化政治经济领域的问题。

2020 年 3 月，除九州大学亚洲-大洋洲研究教育机构外，也曾计划邀请中国社会科学院考古研究所和台湾中央研究院历史语言研究所的研究人员来九州大学举办与殷墟有关的座谈会。不幸的是，由于当年 1 月开始的新型冠状病毒感染流行全球，邀请未能成功。因此，第二年，再一次使用文化变动部门的预算，进行了邀请。但是，因为防止传染病的传播的政策原因再次被推迟了，2021 年我们预备再次邀请。但是，鉴于 2021 年日本第 5 波和第 6 波新型冠状病毒感染的蔓延，我们决定邀请各方学者举办在线讲座。

最初，邀请参加讲座的学者以九州大学亚洲埋藏文化财产研究中心主任沟口孝司和台湾中央研究院历史语言研究所研究员内田纯子为中心。最终，在包括这两位研究者在内的以中国社会科学院考古研究所岳占伟为代表的四名研究人员，和以南方科技大学的唐际根教授和不列颠哥伦比亚大学的荆志淳教授为代表的八名学者的积极参与协助下本次线上讲座得以召开。

本次讲座将结合最新研究成果，探讨商代晚期，即公元前 13 世纪和 11 世纪东亚古代文明中心的商代城市遗址的发展和衰落，及其变化和社会组织的环境。我们将讨论它与波动有关。如果从考古学或人类学角度考察殷墟世界著名文化遗产的意义，对它的保护和认可有帮助，则适合本课题组的的活动。

本次讲座将探讨公元前 13 世纪到 11 世纪东亚古代文明中心——商代晚期殷墟这一都市遗址的发展与衰退，通过最新的调查成果，从社会组织的变化与环境变动的关系的角度进行探讨。如果能够从考古学或者人类学的领域对殷墟这一世界级的文化遗产的意义进行探讨，并对其保护和开发有一些贡献，将是本课题组研究的一大荣幸。

1. 殷商文明における物質的实践

荆志淳

(ブリティッシュ・コロンビア大学人類学系教授)

物質的实践(material practice)とは、食べる、着る、学ぶ、働く、拝む、歩く、遊ぶなど、人が生活の中で刻々と行っている活動のことである。個人、家族、グループ、都市、国家といったさまざまなレベルで社会的アイデンティティが形成されるのは、日常生活の衣食住におけるさまざまな物質的实践を通じてであり、このアイデンティティは不変ではなく、絶え間なく変化するプロセスの中で発展するものである。物質的实践と社会的アイデンティティは弁証法的な関係にあり、相互に構成し、相互に制約し合っている。本稿では、商代後期の都城である殷墟における都市化の過程を、物質的实践の観点から、特に都市グループの形成メカニズム (urban ethnogenesis) について論じる。殷商文明の研究にはマイクロとマクロの視点の融合が重要であり、青銅と玉を例に、技術的選択の観点から物質的实践と社会的アイデンティティの弁証法的関係を論じ、殷商文明興亡の過程とメカニズムを探るものである。



図1 殷墟孝民屯出土土製鑄型

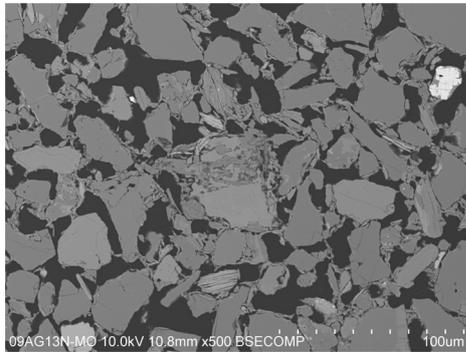


図2 殷墟小民屯出土土製鑄型の微細構造



図3 殷墟大司空村出土石製跪座像

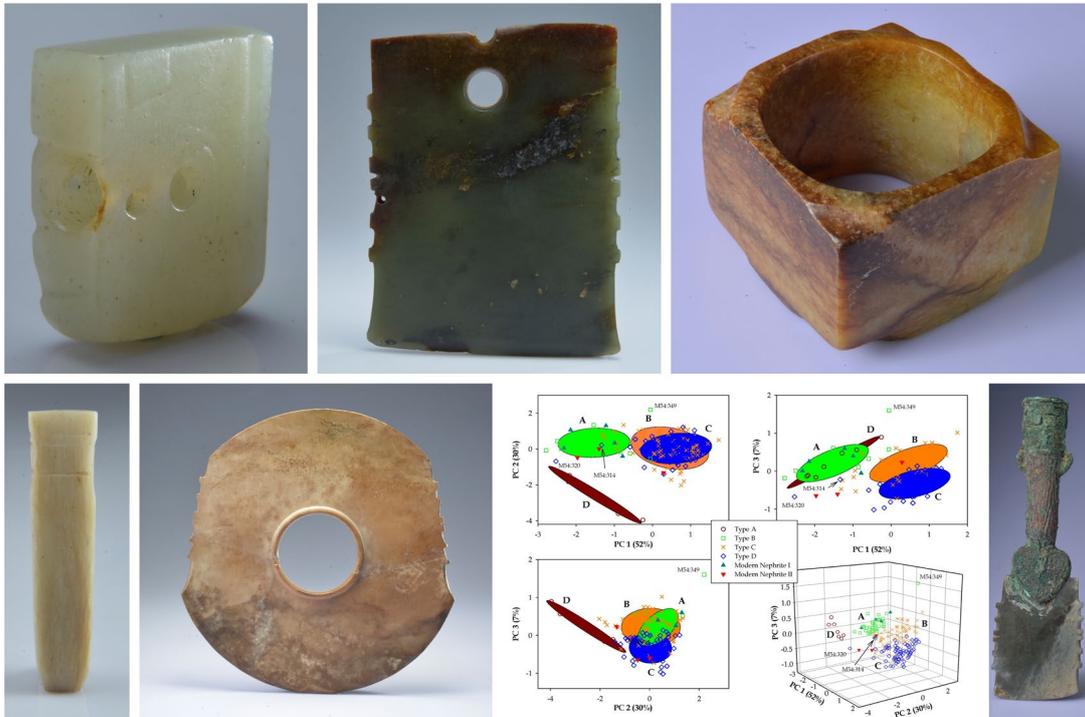


図4. 殷墟花園莊 M54 出土玉器およびその近赤外スペクトル

1. 殷商文明的物质实践

荆志淳

(加拿大英属哥伦比亚大学人类学系东亚考古加拿大研究讲座教授)

物质实践(material practice)是人每时每刻从事的生活活动：饮食、穿衣、学习、劳动、祭祀、行走、戏玩等。正是通过日常生活衣食住行中的各种物质实践，形成了个人、家族，群体、城市和国家不同层次的社会认同 (social identity)，这样的认同不是一成不变的，而是在不断变化的过程中发展。物质实践和社会认同是一种辩证的关系，相互构成，相互制约。本文从物质实践的视野，讨论晚商都城殷墟的城市化过程，特别是城市族群的形成机制 (urban ethnogenesis)。整合微观和宏观视野是研究殷商文明的重要途径，我们以青铜器和玉器为例，从技术选择的角度讨论物质实践和社会认同的辩证关系，进而探索殷商文明兴衰的过程和机制。



图 1. 殷墟孝民屯出土陶范

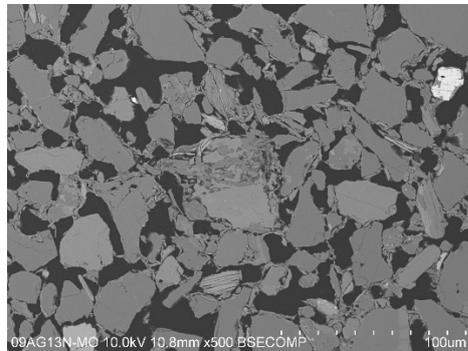


图 2. 殷墟孝民屯出土陶范的显微结构



图 3. 殷墟大司空村出土石跪人像

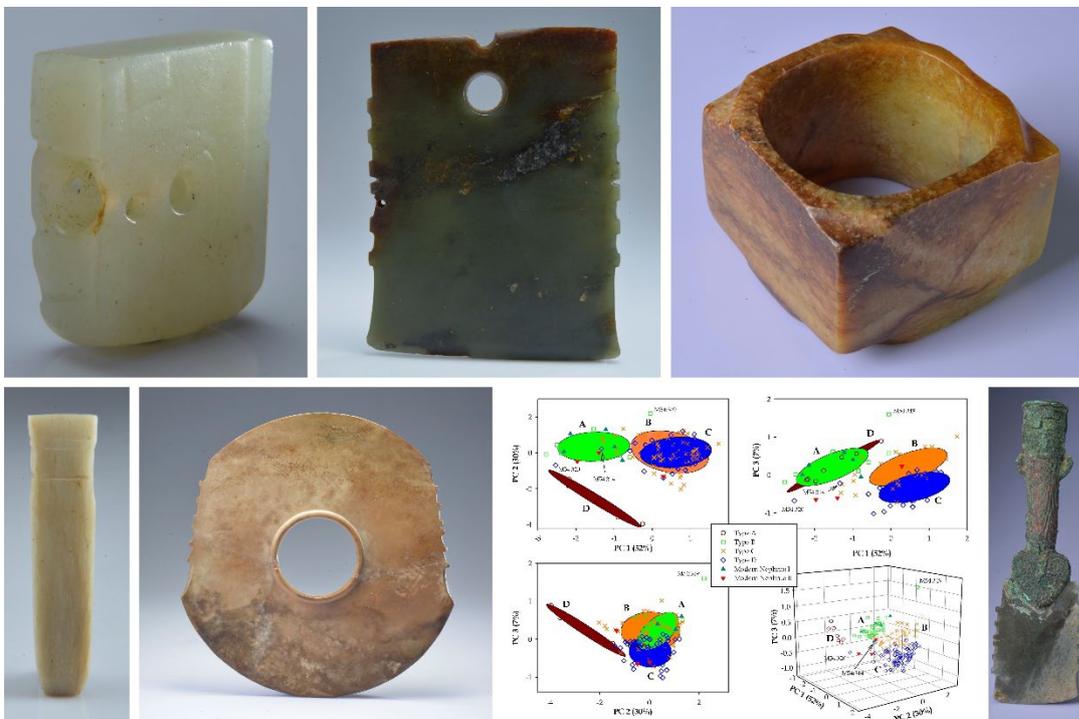


图 4. 殷墟花园庄 M54 出土玉器及其近红外光谱

2.殷墟商末周初期の遺構の識別と研究

唐際根

(南方科技大学教授)

要旨

殷墟は商王朝晩期の都城である。殷墟で発見された古代遺構は、主に商代に属する。しかしながら、90年以上にわたる発掘調査の結果、殷墟では西周の遺構も部分的に発見されている。それは、王陵区、侯家荘南部、小司空南部、小民屯南部、小屯東北部、劉家荘北部、さらに邵家棚、後崗などである。

殷墟の西周遺構を特定するにあたっては、一定の条件を満たす必要がある。

殷墟南部の劉家荘北部では、殷墟第二期から西周中期まで継続的に埋葬された墓地がある。この墓地は、埋葬が「分散的」状態で、互いに切り合いがなく、典型的な商の族墓である。本墓地には、「殷末周初にかけての殷墟文化」を観察する条件を備えている。本墓地の多く(M81、M85、M104、M135)からは、陶觚・陶爵・陶盤のセットが出土している。陶觚の高さは7cm以下、陶爵の高さは5cm以下、陶盤の口径は12cm程度しかない。また、これら出土した墓からは、扉稜を持つ西周期の典型的な陶鬲または、腹部に縦方向のS字文様のある陶簋も発見されている。これら小型の陶觚・陶爵・陶盤は西周時代に下る典型土器で、墓が西周時代であるかどうかを判断する材料になる。陶觚・陶爵・陶盤の小型「3点セット」は、殷墟の各墓地において、西周時代の「商墓」を検出する重要な指標となる。このような小型「3点セット」を副葬する墓は、商滅亡後に殷墟に居住した「遺民」の墓である可能性がある。

2. 殷墟所见商末周初遗存的辨认与研究

唐际根

(南方科技大学教授)

摘要

殷墟是商王朝晚期都城。殷墟发现的古遗存主要属商代。然而在长达 90 余年的考古发掘中，殷墟也发现部分西周遗存，分别见于王陵区、侯家庄南地、小司空南地、孝民屯南地、小屯东北地、刘家庄北地、以及邵家棚和后冈等地。

殷墟的西周遗存的辨识则需要一定条件。

殷墟南部刘家庄北有一处墓地从殷墟二期开始有人埋入，一直沿续到西周中期。该墓地里，墓葬“分片聚集”，墓葬相互间没有打破关系，应该是一处典型的商人家族墓地。此处墓地具备观察“殷墟文化跨越商末周初”的条件。此墓地有多座墓葬（M81、M85、M104、M135）出土有成套的陶觚、陶爵、陶盘。陶觚高度在 7 厘米以下、陶爵高度在 5 厘米以下、陶盘口径只有 12 厘米左右。与这批器物同出一墓的，还有带扉棱的西周陶鬲或腹部带竖向 S 纹的陶簋。由此可知此种小号陶觚、陶爵、陶盆，是年代已经进入西周时期的典型陶器，可以用于判定墓葬是否已经进入西周时期。陶觚、陶爵、陶盘小型“三件套”，对于殷墟各墓地中清理出西周时期的“商墓”具有标尺意义。这种以小型“三件套”为随葬品的墓葬，或即商亡国之后仍然居住于殷墟的“遗民”之墓。

3. 洹北商城工房遺跡の発掘とその収穫

何毓靈

(中国社会科学院考古研究所研究員)

手工業考古学は考古学の重要な一分野であり、この20年間、殷墟の手工業考古学は大きな発展を遂げ、それに対応する研究もより深くなり、多くの学者の広範な関心と深い関与を引き起こした。1999年に発見された洹北商城は、城郭、宮城、宮殿区、貴族・平民居住区からなる、総面積4.7km²の商時代中期の都城であった。洹北商城は鄭州白家莊期より早く、殷墟一期晩段より早い時期である。この遺跡の性質については、盤庚の殷、河亶甲の相、あるいはその両方であるとの学説があり、いまだに論争が続いている。また、都城である以上、殷墟同様、手工業工房もあったはずである。

2015年、中国社会科学院考古研究所安陽工作隊は、洹北商城の宮城北壁の北570m、現在の韓王度村の東で手工業工房を発見し、本遺跡の継続的な調査・発掘を、今年まで8年間にわたって行った。結果、計約30万m²を調査、約5000m²を発掘し、鑄銅、骨器製作、土器製作工房跡を発見した(図1、2)。遺跡は地表下1.2~1.5mにあり、さまざまな遺構が重なり、切り合う複雑な構造になっている。鑄銅、骨器・土器製作における手工業の多様な特徴に対応するため、フィールド考古学の規定と手工業生産の製作工程(chaine opératoire)の理論に基づき、安陽工作隊は学際的な統合を重視した実際に効果的な発掘方法を開発し、重要な成果を収めた。遺構や遺物から判断すると、いわゆる「工房」は、実際には生産および生活遺構、そして埋葬が絡み合っていた。明確な区画を持つ、機能的に均質なものではなく、異なるタイプの工房の遺構が混在していた。もっとも、層位学・土器型式学の援用によって、特定の時代の主要・副次遺跡をさらに特定することもできる。そうすれば、さまざまな生産・生活・埋葬の中心が少しずつ移動していることが示唆されることになる。

1. 銅鑄造工房

鑄銅生産に関連する遺跡は、大別すると、版築建築物、鑄型製作土坑、井戸、廃棄物堆積坑、祭祀坑などである。

版築建築物には大きく分けて、石積の基壇と、小型版築家屋の2種がある。石積基壇には狭い壁と少数の柱基礎があることから、土製鑄型や原型、芯の生産に関連した小型建物があつたことが推測される。小型版築家屋は、一般に十数m²の大きさしかなく、非常に質が悪いので、おそらく納屋の類であろう(図3)。

工房区には鑄型製作土坑があるが、泥土形成坑、醒泥坑、乾燥坑、焼成窯などは未発見である。十数本の井戸が見つかっており、数の多さから言って、明らかに生活用水だけでなく、生産用水が用途の中心であった。石積基壇のすぐ東側には大きな踏み跡の活動面があり、多くの活動層に分かれている。この表面からは、炉底部や紅焼土面などが発見された。これらは、銅の溶解や鑄造活動に関連するものであるが、発掘範囲が限られているため、関連遺物は少ない状況にある。

工房区の遺構で最も多いのは、不規則な形をしたさまざまな土坑である。これらが廃棄物を埋めるために意図的に掘られたとは言い難いが、不要になった井戸、埋納坑、鑄型製作土坑、土壌採取坑、溝などは廃棄に最も適した場所である。これらには、鑄銅・骨器製作関連遺物のほか、土器、食料廃棄物などの生活遺物も多く含まれており、生産と生活が混在し、特に機能分化していたわけではないことがよく分かる。

夏・商・周時代の遺跡では、祭祀的な性格の遺物が多く、多種多様である。謝肅は、商代の手工業工房跡にある祭祀遺跡を主題として論じている。洹北商城の工房区では、人牲祭祀坑、牛角祭祀坑、牛頭祭祀坑など、多くの祭祀遺跡が発見された。特に、H590羊祭祀坑は珍しい。甲骨や文献に対応するものがあり、羊の血を採取し、青銅器に塗布したことを示す優れた証拠である。

殷墟では、さまざまな家族がさまざまな地区に独立して住み、そこで生まれ、埋葬された。居住区と墓地は絡み合い、重なり合っており、これを「居葬合一」モデルと呼ぶ学者もいるほどである。手工業工房も同様で、手工業に従事する職人は家族を単位に、代々受け継がれていく。洹北商城の鑄銅工房区から発見されたいくつかの墓は、整然と同じ方向に配置され、一定の計画性を持っており、家族墓地の特徴を示している。日常土器が副葬されているほか、羽口や砥石、彫刻刀など鑄銅用道具が副葬されている墓もある。また、土製鑄型を持つ墓も15基あつた。こうした職人の墓の発掘により、商代の青銅器生産組

織・管理・運営、職人の階層と地位、生産技術の伝承と革新に関する研究の基礎が固まったのである（図4、5）。

鑄銅生産に関わる遺物は、溶銅と鑄銅の2種類に大別される。溶銅遺物には、主に炉片、土管、銅スラグ、木炭などがある。洹北商城で発見された炉片は数も大きさも小さく、炉壁は内外2層に分かれているものがほとんどである。内壁表面は、ほとんどが1層または数層の銅液が粘着している。現在のところ、銅液を流す装置は見つかっていない。土管は送風管（羽口）とも呼ばれ、鑄銅工房の指標とされ、洹北商城鑄銅工房で発見された送風管（羽口）の数は多く、一般的な傘形やキノコ形に加え、袖形や、管中央の突起に人面を施したものもある。

鑄銅遺物には、主に土製鑄型、中子、原型などがあり、その数は比較的多い。殷墟に比べ、洹北商城の土製鑄型、中子、原型は数が少なく、サイズも小さく、柔らかである。焼成温度が非常に低い、あるいは未焼成で、鑄型は殷墟のものよりも厚みがある。最も顕著なのは、青銅文様を「嵌め込む」技法である（図6）。数個に分割した文様を組み立て、鑄型本体をくり抜いた装飾帯の溝にはめ込む技法は、殷墟（商代後期）に引き続き用いられた（図7）が、数は大きく減少した。

2. 骨器製作

2015年には、鑄銅工房の遺物とともに、骨器製作の端材や未製品、骨器専用の砥石などの工具も大量に出土した。これらの骨器製作遺物は、他の生産・生活廃棄物と混在し、土坑や廃棄された井戸、貯蔵穴に埋もれていた。また、文化層の堆積内にも見られる場合があるが、骨器製作の廃棄物の単純集積坑は見つかっていない。初歩的検討において、洹北商城の骨器製作技術が非常に特殊であることが判明し、我々の大きな関心を集め、それ以降数年に渡って、鑄銅工房のほかに、骨器製作工房も引き続き探査することとなった。

2020年前半、韓王度村の北側で、ボーリングと試掘により、骨器・土器工房が発見された。調査の結果、韓王度村東部とは異なり、約1200㎡の範囲内に大量の骨器製作廃棄坑が、厚く堆積、密集して発見された。2020年10月から正式に発掘調査が開始されたのであるが、発掘に先立って詳細な発掘計画が策定された。特に、これまでの骨器製作工房の発掘調査では行われていなかった、全面篩い掛け、現場での骨種鑑定、層ごとの清理方法などを制定した。これによって、骨器生産に関するあらゆる情報を抽出し、当時の骨器製作工房の原料供給、生産技術・規模、製品種類・流通など多くの問題を深く研究することが可能となる。そして、異なる時代や地域の工房と比較して、その共通点と相違点をまとめ、洹北商城における骨器生産の独自性を際立たせることができる。

今までに、材料屑の廃棄坑7基、土坑72基、住居跡3基、埋葬6基が発見され、現在も発掘調査が行われている（図8、9）。廃棄坑は、いずれもその下の版築住居基壇を壊しており、比較的浅く、中には廃棄物がマウンド状に地面から盛り上がっているものもある。廃棄坑内の動物骨の大半は、集合穴の動物骨の大半は骨器原料であり、非原料の骨は多くない。未製品、完成品の数も少ない。骨器原料としては牛の四肢骨の関節屑、骨幹の残骸、未製品、鹿の角材など、非原料性のものでは、四肢骨に接続する腕骨や跗骨などが主で、亀甲や豚、犬、羊、鳥の骨も若干ある。

夏商周時代の他の骨器製作工房と異なる最大の点は、洹北商城では「剥片法」と呼ばれる独特の製材方法を採用していたことである（図10）。「剥片法」とは、骨材内壁を残して、外壁の周囲を縦に2回空鋸引きする方法である。実験結果は、この方法が技術的に難しく、技術の形成メカニズムもほとんどわかっていないことを示しており、この技術の独自性の表れともいえる。

3. 土器製作

骨器製作工房のすぐ近くには土器製作工房があり、両生産区域は入り組んでいて、生産廃棄物が混在していることもあった。4基の窯跡が発見され、土器生産に関連した土坑もある。

窯はいずれも小型の昇炎式で、保存状態が悪く、焼成室底部より上は破損している。例えばY1は、平面が瓢形で、燃烧室が北側に位置する。幅狭で長く、北側の壁は内側に弧を描いており、燃烧室の壁面は青灰色の焼結体である。焼成室は平面円形で、中央部東側に窯柱が長方形に配置される。その東西に火道があり、火道底部は青灰色の焼結体を呈し、焼成室底部には窯滓と灰の層が形成されている（図11）。

北方地区の土器窯では、窯割れのリスクを減らすため、地山に窯を掘り込む方法を選ぶことが多い。洹北商城の窯の発掘・分解から、洹北商城の陶工たちは、軟らかく不均質な土層に窯を掘り、その中に敷きつめた土層を突き固めた。そしてその版築中に、再度窯を

掘った後、窯壁全体を厚い草混じりの泥層で覆うという、好ましくない土壌条件での窯形成・土器焼成の問題を解決したことがわかる。また、無柱および有柱両種の昇炎式窯で焼成する技術を掌握していた。窪んだ火道は火の流れに沿って窯底部まで続いており、特殊な火力調整技術を反映している。これは、陶工たちが高い適応力を持ち、熟練した多彩な焼成技術を習得していたことを示唆している。

4. 結語

長年にわたって発掘が続けられてきたとはいえ、それは工房区全体のごく一部に過ぎない。しかしながら、以下のような予察的な指摘は可能である。

洹北商城の工房は洹北商城早期に開始し、鑄銅と骨器製作が最初に始まり、土器製作の工房開始時期は不明である。生産活動は洹北商城後期まで続き、鑄銅、骨器・土器生産も均しく続いた。これは手工業考古学の研究にとって重要であるだけでなく、洹北商城の性格を判断する上でも極めて重要である。

殷墟同様、洹北商城ではさまざまな種類の手工業生産が比較的集中し、「工業区」を構成していた。これは夏商周三代の手工業生産に共通する傾向で、その根本的な原因は、支配者による生産の統制と管理にある。また、この工業区は都城の重要部分であり、そのレイアウトの研究とも深く関連する。

洹北商城における「嵌め込み」技法による鑄造技術、「剥片法」による骨器製作技術、そして土器窯の築造技術は、この時期の手工業生産に独自性があることを示しており、「洹北モデル」と呼ぶことができるだろう。洹北モデルが形成された要因と、その後の殷墟形成に与えた影響については、今後さらに検討する価値があると思われる。

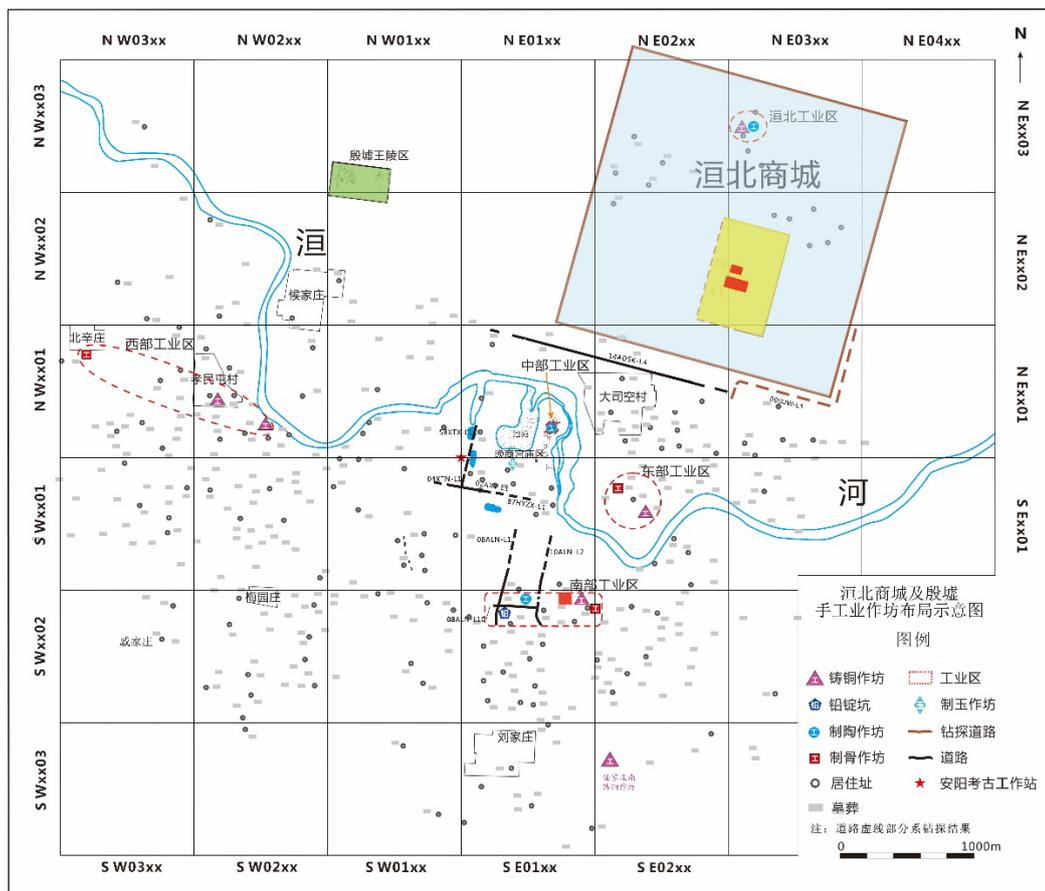


図1 洹北商城および殷墟手工业工房分布図

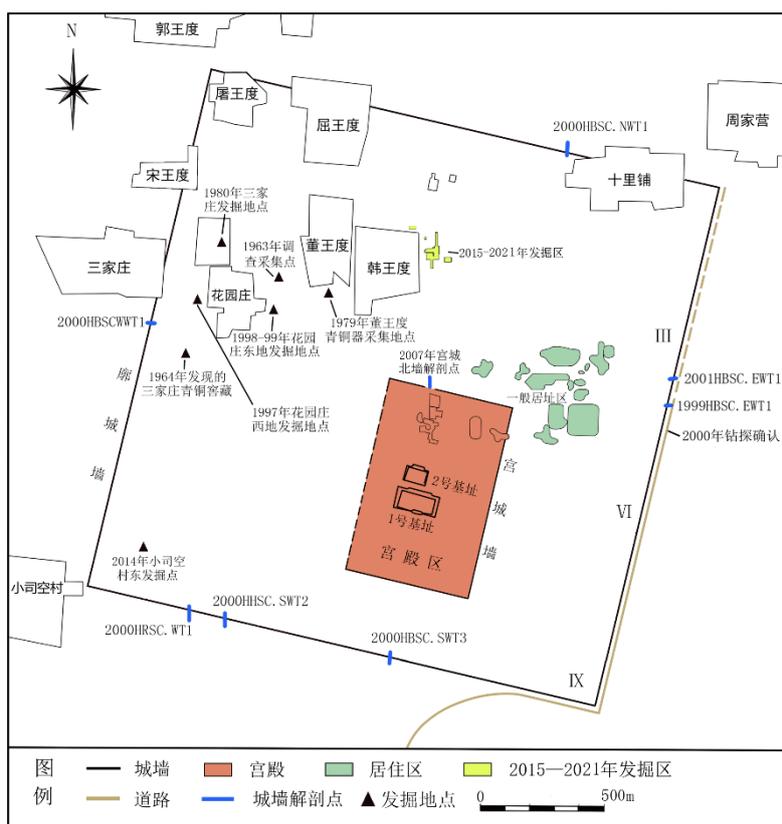


图2 2015-2021年工房区发掘调查地点

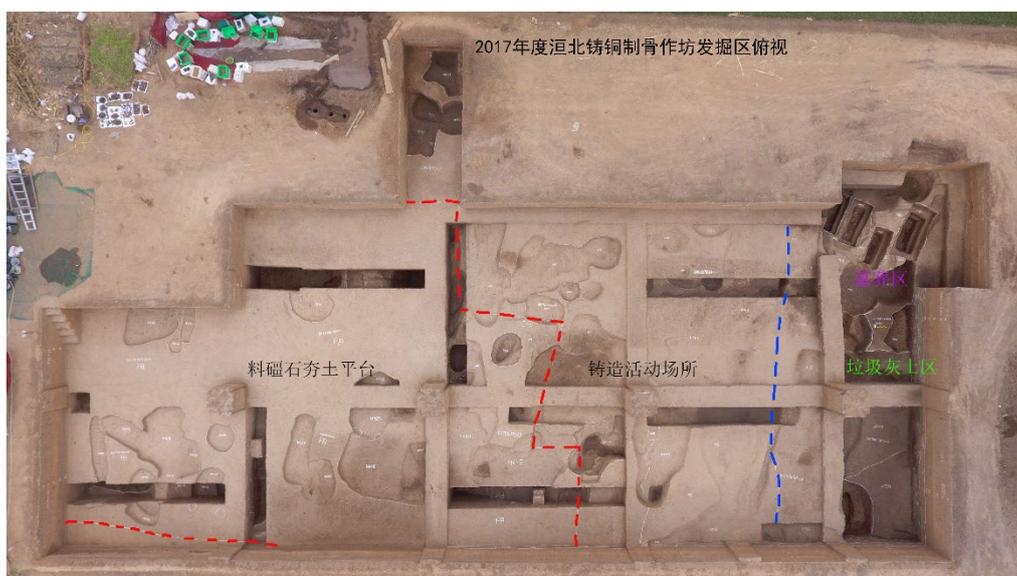


图3 2017年发掘调查区（俯瞰）



图4 2017年检出工人墓



图5 M54副葬品构成



图6 H220:23 列旗文嵌め込み土製铸型



图7:2003 孝民屯 H225:84 土製铸型



图8 H32 第2層骨角出土狀況



図9 土壌選別された骨角



図10 剥片法による廃材



図11 土器窯 Y1 (俯瞰)

3. 洹北商城作坊遗址的发掘与收获

何毓灵

(中国社会科学院考古研究所研究员)

手工业考古是考古学重要组成部分,近二十年来,殷墟手工业考古取得了巨大进展,相应的研究也更加深入,引起了众多学者的广泛关注与深度参与。洹北商城发现于1999年,为商代中期都城,由郭城、宫城、宫殿区、贵族与平民居住区等组成,总面积4.7平方公里。其年代晚于郑州商城白家庄期,而早于殷墟一期晚段。性质尚有争议,盘庚之殷、河亶甲之相,或二者兼俱,均有学者提出。而作为都城,与殷墟一样,一定会有手工业作坊。

2015年,中国社会科学院考古研究所安阳工作队在洹北商城宫城北墙以北570米处,现韩王度村东发现洹北商城的手工业作坊,随后对其进行持续的调查、发掘,至今已第8年,共钻探、调查约30万平方米,发掘近5千平方米,发现了铸铜、制骨、制陶作坊遗址(图1、2)。遗址距地表1.2-1.5米,各种遗迹相互叠压、打破,十分复杂。针对铸铜、制骨、制陶手工业不同特性,依据田野考古操作规程及手工业生产操作链理论,强调多学科结合,安阳队制订了行之有效的发掘方法,取得了重要成果。从遗迹、遗物判断,所谓的“作坊”实际是生产与生活遗存,以及墓葬相互交织在一起,且不同种类的作坊遗存相互混杂,并非分区明确、功能单一。当然,如果借助于田野地层学以及陶器类型学研究,可以进一步辨识出某一时间段的主要和次要遗存,这说明,不同阶段生产、生活及墓地的中心略有挪移。

一、铸铜作坊

与铸铜生产相关的遗迹大体有夯土建筑、范土坑、水井、熔铸场所、废弃物堆积坑、祭祀坑等。

夯土建筑主要有料礓石台基及小型夯土房基两种。料礓石台基之上有窄墙和少量柱础,这说明其上还有小型建筑,可能与陶范、模、芯等制作有关。小型夯土房基一般只有十几平方米,质量很差,可能属工棚类建筑(图3)。

作坊区内有范土坑,但尚未发现和泥坑、醒泥坑、晾范坑、烘范窑等。已发现十几眼水井,数量较多的水井显然不仅是满足生活用水,更主要是用于生产。紧临料礓石台基东侧有一处大面积踩踏活动面,活动面路土分为多层。此活动面上发现了熔炉残底和红烧土面。这些应与熔铜与浇铸活动有关。不过,因发掘面积有限,目前这方面的遗迹还发现较少。

作坊区内最多的遗迹就是各种形制不规整的灰坑。从形制分析,很难说这些灰坑是刻意开挖以供填埋垃圾的,而弃置不用的水井、窖藏坑、范土坑、取土坑、水沟等都是填埋垃圾的最佳场所。这些废弃物堆积坑内除了大量的铸铜、制骨遗物外,也有大量的陶器、食物垃圾等生活遗物,这充分说明生产与生活混杂在一起,二者未专门分开形成不同的功能区。

在夏商周时期遗址中,具有祭祀性质的遗存数量均不少,种类丰富、形式多样。谢肃就商代手工业作坊遗址内的祭祀遗存进行过专门的讨论。洹北商城作坊区内发现多处祭祀遗存,有人祭坑、牛角祭祀坑、牛头祭祀坑等。特别是H590羊祭坑较为少见,与甲骨与文献相印证,是取羊血衅铜器的绝佳证明。

殷墟都城内不同家族相对独立居住在不同的区域之内,生于此、葬于此,居址与墓地相互交织、重叠,有学者称其为“居葬合一”模式。手工业作坊同样如此,从事手工业生产的工匠以家族为单位,世代相传。洹北商城铸铜作坊区内发现一些墓葬排列有序,方向一致,有一定的规划性,显现出家族墓地的特征。除陪葬日用陶器外,有些墓葬随葬铸铜生产工具,如鼓风嘴、砺石、刻刀等,另有15座随葬了陶范。工匠墓的发掘,为研究商代青铜器生产组织、

管理、运营，工匠阶层的等级、地位，生产技术的传承与创新等诸多问题奠定了坚实的基础（图4、5）。

与铸铜生产相关的遗物主要有熔铜与铸铜两类。熔铜遗物主要有熔炉残块、陶管、铜渣、炭块等。洹北商城目前发现的熔炉残块数量不多，尺寸偏小，炉壁多分为内、外两层。内壁表面多黏结有一到数层铜液。目前尚未发现浇包类器具。陶管又称鼓风嘴，被看作铸铜作坊的指示器，洹北商城铸铜作坊内发现陶管数量多，除常见的伞状或蘑菇状陶管外，还发现套管状、凸棱位于陶管正中部、凸棱雕刻形人面型等陶管。

铸造遗物主要有陶范、芯、模等，数量较多。与殷墟相比，洹北商城陶范、芯、模等数量少、个体小、较为疏松，烘焙温度很低，甚至未经烘焙，陶范普遍厚于殷墟陶范。最为突出的是青铜纹饰制作的“嵌范”技术（图6）。被分割成数个单元的花纹范被组装、镶嵌于主体范型腔上掏挖出的纹饰带槽内，这种技术到殷墟时期仍继续沿用（图7），只是其数量大大减少。

二、制骨

2015年就发现与铸铜作坊遗物同出的还有大量的制骨的废料、半成品，也发现有专门打磨骨器的砺石等工具。这些制骨遗物与其他生产、生活废弃物相混杂，填埋于灰坑、废弃的水井和窖穴等遗存中，甚至在文化层堆积中也有所发现，但基本未发现十分单纯的制骨废料堆积坑。初步研究不难发现，洹北商城制骨技术十分特殊，引起了我们的高度重视。随后几年除了铸铜作坊之外，我们也在不断寻找制骨作坊。

2020年上半年，通过钻探与试掘，在韩王度村北发现制骨、制陶作坊。勘探发现，与韩王度村东不同的是，在大约1200平方米范围内，发现大量制骨废料坑，堆积深厚、密集。也发现有夯土建筑基址、墓葬、水井等遗迹。2020年10月起正式发掘。发掘之先，制订了详细的发掘方案，特别是全面筛选、现场鉴定、逐层清理等方法是以以前制骨作坊发掘所未采用的。唯有如此才能全面提取与制骨手工业生产相关的所有资料信息，全面深入研究当时制骨作坊原料供应、生产技术、生产规模、产品种类、产品流通等诸多问题，并与不同时期、不同地域的制骨作坊对比，归纳其共性与差异，从而凸显洹北商城骨器生产的独特性。

目前已发现制骨废料坑7个，灰坑72个，房址3座，墓葬6座，发掘工作仍在进行中（图8、9）。废料坑都打破其下的夯土房基，较浅，有些废料甚至凸起成堆状而高于地面。骨料坑中动物骨骼绝大部分为骨料，非骨料性骨骼不多。半成品、成品的数量也很少。骨料有牛四肢骨的关节废料、骨干余料、残坯料以及鹿角料等，非骨料性骨骼主要是肢骨上连带的腕骨、跗骨等，也有少量龟甲以及猪、狗、羊、鸟的骨骼。

与夏商周时期其他制骨作坊最大不同的是，洹北商城制骨作坊采用了独特的“剥片法”锯取骨料的方式（图10），所谓剥片法，就是围绕骨干外壁纵向两次锯切坯料，骨干内壁保持原样。实验结果表明，此种方法技术难度较大，目前对此技术形成机制所知甚少，但恰好表明其技术的独特性。

三、制陶

与制骨作坊紧临的是制陶作坊，二者的生产区相互交错，生产废弃物甚至混杂在一起。目前工发现陶窑4座，另有与陶器生产相关的灰坑等。

陶窑的规模均不大，升焰窑，保存不佳，窑算以上均被破坏。以Y1为例，平面为葫芦状，火膛位于北部，较狭长，北壁弧内收，火膛壁面上为青灰色烧结面。窑室平面呈圆形，窑柱位于窑室中部偏东，呈长方形，窑柱东西两侧为火道，火道底部为一层青灰色烧结面，窑室底部发现一层碎窑渣及灰烬（图11）。

北方地区陶窑多选择生土中掏挖陶窑，以降低陶窑开裂风险。经过对洹北商城陶窑的发掘与解剖可知，洹北陶工在土质松软、质地不均的土层中挖窑，通过掏挖基坑层层垫土夯打，再在夯土中掏挖成窑，之后窑内壁整体贴敷厚草拌泥层的方式，解决在土质不利的条件下建窑烧

陶的问题。可能同时掌握用无窑柱和有窑柱升焰窑烧陶的技术。陶窑的凹槽形火道顺着火眼一直延伸到窑底，反映特殊的火力控制技术。这说明陶工适应性强，掌握的烧陶技术娴熟，多样。

四、结语

虽然已持续发掘多年，但相较于整个作坊区来说，还仅是其中很小一部分。不过可以初步得出以下几点认识：

洹北商城作坊始建于洹北商城早期，铸铜、制骨均在早期就开始生产；制陶作坊始于何时，目前还不确定。生产活动持续到洹北商城晚期，铸铜、制骨、制陶生产均在进行。这不仅对研究手工业考古关系重大，对于判断洹北商城性质也至关重要。

与殷墟一样，洹北商城不同种类的手工业生产相对集中在一起，构成“工业园区”，这是夏商周三代都城手工业生产共同趋势，其根本原因与统治者对生产的控制与管理有关。工业园区同样是都城的重要组成部分，对于研究都城布局关系重大。

洹北商城“嵌范法”铸制技术、“剥片法”制骨技术以及熟土区建造陶窑技术均说明此时手工业生产有其独特性，我们可以称其为“洹北模式”。洹北模式形成的原因、对此后殷墟形成的影响都值得进一步研究。

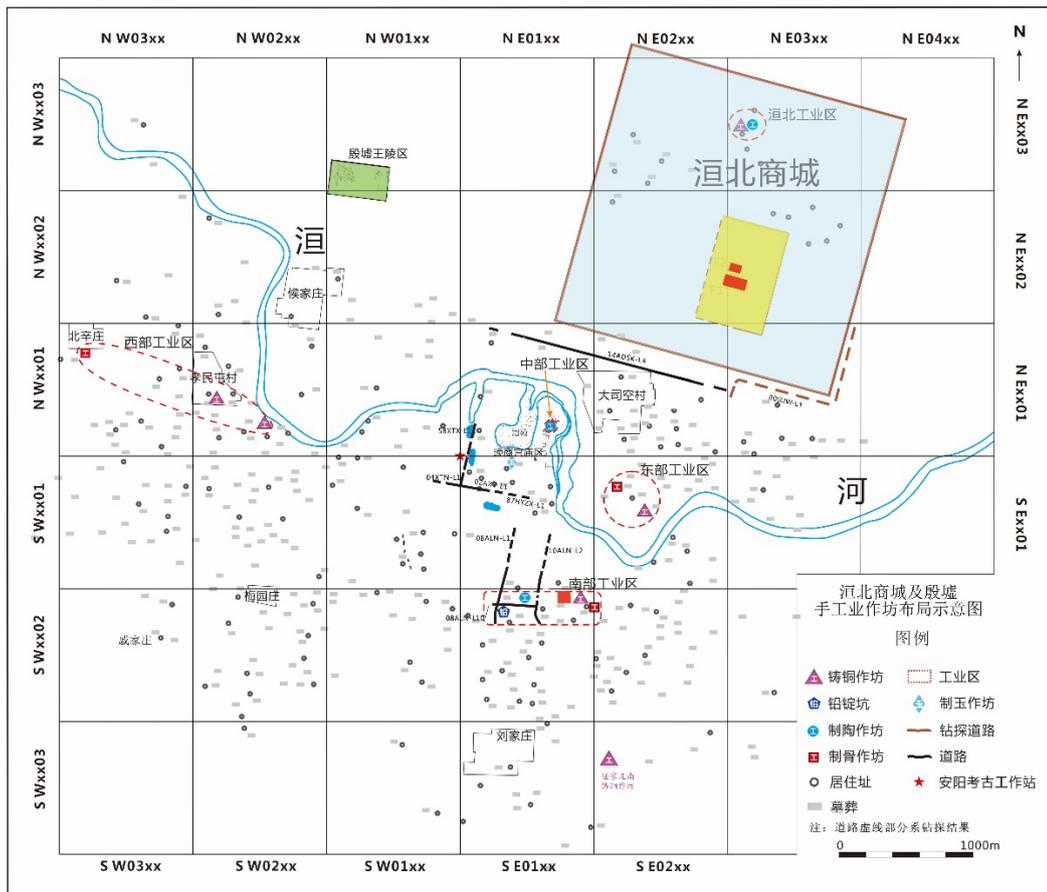


图 1：洹北商城及殷墟手工业作坊布局示意图

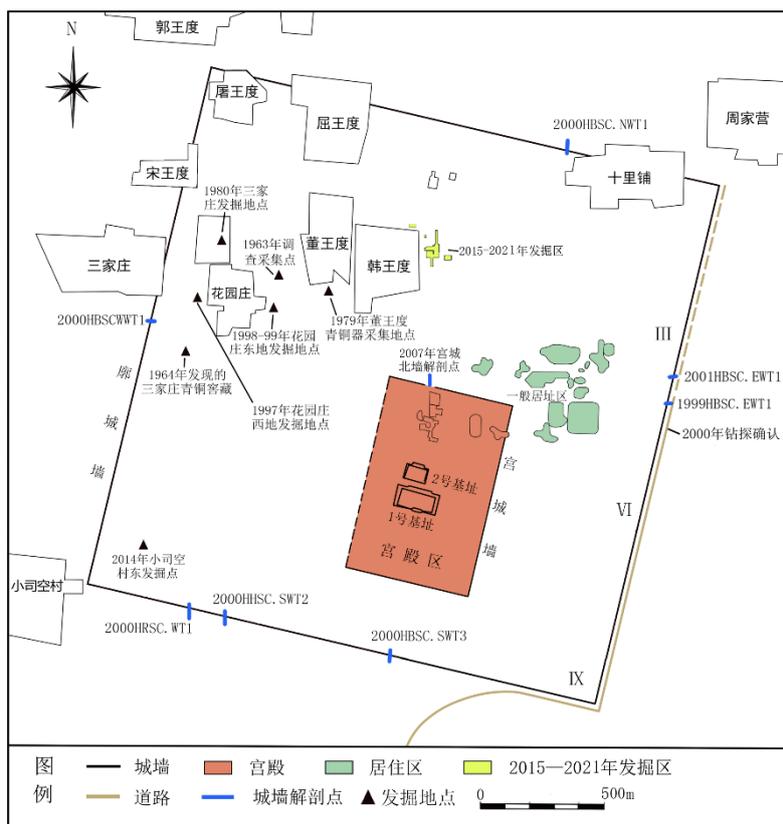


图 2：2015—2021 年作坊区位置图

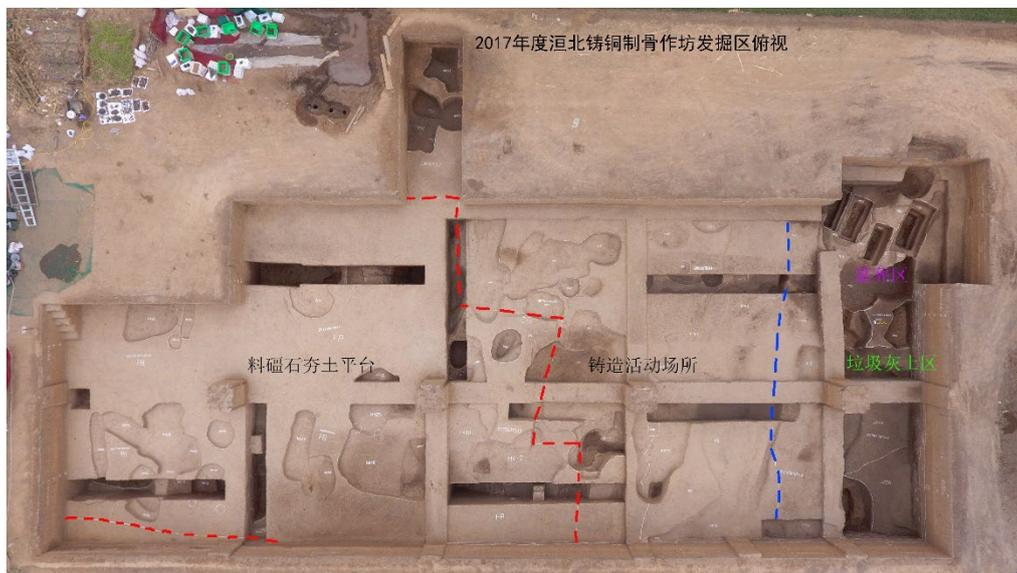


图 3、2017 年发掘区俯视照片



图 6: H220: 23 列旗纹嵌范正面



图 7: 2003 孝民屯 H225 : 84 陶范正、背面



图 8: H32 第二层骨骼



图 9：干筛出的边角料



图 10：剥片法取骨料后的废料



图 11：陶窑 Y1 俯视

中心とした、小屯宮廟区の大規模探査・重点的試掘であり、重要な成果を挙げている（詳細は後述）。

一般的には、第1段階の成果が最も重要で、甲、乙、丙組の建築基壇は、小屯宮廟区の核となる要素である。第3段階の発掘による、凹字形建築基壇は、以上3組の基壇を補完する。そして、この4組の建築基壇が、小屯宮廟区の基本構造をなしているのである。

2. 過去20年間における小屯宮廟の考古学的収獲

2000年から20余年の間に、小屯宮廟区で比較的集中して行われた考古学調査には2つの段階がある（図2）。

前期は2000年から2005年である。村民住宅の改修と殷墟の世界遺産の申請に伴い、小屯宮廟区で3回の考古発掘調査が行われた。まず、2000年には花園庄村東部で商代墓葬と住居跡が発掘された。中でも重要なのは花東のM54の発掘で、精巧な青銅器と玉器が発掘された。次に2002年、小屯南路において東西450mのトレンチを設定し、多数の土坑、貯蔵穴、井戸、版築住居基礎、祭祀坑などの居住遺跡を発見し、200点余りの刻辞甲骨が出土した。第三は、2004年から2005年における小屯宮廟区の甲、乙、丙、丁4組の建築基壇とその周辺の系統的調査である。新たに100近い版築住居基礎と池苑遺構を発見し、併せて甲組基礎西南部の発掘を行った。



図2 小屯宮廟区における池苑・中心島の構成

後期は2019年春から2020年秋である。小屯宮廟区での継続的探査と発掘によって、主に4つの成果が得られた。第一に、池苑跡が体系的に探査され、池苑遺構全体の範囲と堆積状況、そして周辺遺構との基本的関係が明らかになった。第二は、小屯宮廟区の中心部分の発見である。その周囲は島状に水域で囲まれるため本稿では「中心島」と称する。また、島は東西の溝によって北と南に分かれており、本稿ではこれらを「北島」「南島」と呼ぶことにする。3つ目は、甲組基礎の北側で発見された土塁である。最後には、乙20建築基礎の発掘調査によって、四合院建築群が確認されたことである。

3. 小屯宮廟区の構成を新たに探る

以前の第1から第3段階までの探査と発掘を通じて、学界の基本的な認識は次のようなものであった。洹河南岸内角の高台に位置する小屯北東部が商代晩期の宮殿宗廟区であり、甲、乙、丙、丁の4組の版築建築物で構成される。また、これらの建物跡の周囲には比較的多くの祭祀遺構と極めて整った地下排水路がある。そして、婦好墓周辺に多数の一般住居址が分布し、婦好墓東側から丙組基壇の間に玉器工房とみられる半地下式住居址が発見された。こうした認識にもかかわらず、考古学者が知らない空白地区がまだ多く、宮廟区の構成・構造もはっきりしていない。しかしながら、第4期の考古調査・発掘を経て、小屯宮廟区の構成は徐々に明らかになりつつある。

1. 小屯宮廟区の範囲について

殷墟2期末以前、宮廟区の範囲は、1950年代に発見された大灰溝の内側に限られていた。殷墟2期末、3期初頭に王族を構成する人数が増え続け、宮廟区の規模も拡大し、宮廟区の防御施設として機能していた大灰溝は放棄され、その西側にも宮廟区が広がったのであろう。

2. 池苑遺構と周辺の水利システムについて

池苑遺構は、2004年から2005年にかけて行われた宮廟区の体系的探査で初めて発見され、2019年から2020年にかけて池苑の探査が行われた。池苑は5万㎡近い面積を持ち、最も深いところでは16メートル以上あり、当時の地下水位をはるかに超えている。その西北側では水道路が洹河に接続して、取水口として機能し、東側にも排水路として洹河に接続した水路があった。両水路とも洹河の近くにダム施設を持ち、池苑の水位を調節する役割を担っていた。池苑、取水路、排水路、洹河そして宮廟区における、科学的かつ複雑な地下排水システムによって、小屯宮廟区はほぼ完璧な水利構成をなしていた。

3. 中心島について

以前から認識されていた甲、乙、丙、丁4組の版築建築基壇は、重要ではあるが、宮廟区を中心ではなかった。ここ20年の考古調査の結果、池苑遺構の北側には、甲、乙、丙3組の建築基壇があった地域よりも平均標高が1.5m高い段丘が分布していることが明らかになった。そして、段丘の北側に洹河、西側に池苑取水路、南側に大規模の池苑、東側に池苑排水路があり、段丘は四方を水に囲まれた島状になっている。そこで、宮廟区の「中心島」と呼ぶことにした。中心島の面積は約3万㎡で、北が高く南が低い。中央部は、池苑の取水路と排水路を結ぶ東西の溝で南北に分かれており、それぞれ「南島」・「北島」と呼ぶことにする。

探査と発掘によると、中心島には数多くの版築があり、これらの中には河近くに建てられたものもあり、特殊な性格のものである。1970年代に中心島で発掘された殷墟唯一の龍文大型石製磬（長さ80cm余）は、中心島が高水準であり、商王族の中心人物達が居住していたことを否定できないことを示唆している。

4. 版築建築基壇群について

小屯宮廟区では54基の版築建築基壇が出土しており、婦好墓と花東M54周辺の小型版築を加えると、その数は100基近くになる。しかしながら、これらが小屯宮廟区のすべての版築建築基壇であるとはとても言えない。探査によると、小屯宮廟区内には、まだ発掘されていない100以上の版築基壇が確認されている。宮廟区にはまだ広い空白地があり、今後の考古学的調査によって探索する必要がある。

5. 甲組基壇の性格について

従来、甲組基壇は商王族の寝殿とする説が一般的であった。しかし、20年近くにわたる探査や発掘、研究を経て、本基壇は王族が管理する手工業工房区で、王族寝殿は別の場所にあったと考えられており、中心島にあった可能性も否定できない。

6. 宮廟区内の手工業工房について

これまで小屯宮廟区内では、鋳銅、石・玉・骨・貝器製作、亀甲製作など、さまざまな手工業工房跡が発見されており、土器製作工房の存在も否定できない。このことは、商王族が手工業工房を自らの支配下に置いていたことを示唆している。

まとめると、小屯宮廟区の構成は以下のような特徴があることがわかる。

1. 宮廟区の立地は、やはり商人慣用の理念を受け継いでおり、洹河南岸内角に王族の邑として計画・建設された。宮廟区の構成は、自然地形と水系を十分に利用したもので、地質により寝殿を設け、地勢により池苑を置いたのであった。ここでは、自然と文化が見事に融合している。

2. 南島と北島を含む中心島は、小屯宮廟区の中心区域であり、商王族の重要人物が居住していた。以前に発掘された、乙、丙、丁組の基壇は商王族の朝堂と宗廟、甲組は手工業工房区であったと考えられる。

3. 池苑東側と北側の中心島には、大規模建築基壇が分布し、商王族の重要成員が住居していたと考えられる。一方で、池苑遺構の南側には、小規模住居や半地下式住居が分布し、商王族の中下位成員の居住地であった。池苑に近いほど居住者の地位が高く、遠くなるほど低くなる。

4. 問題

1. 小屯宮廟区では、未発掘の版築が 100 基以上発見されており、宮廟区の構成の探求にはまだ長い道のりがある。

2. 中心島と池苑遺構は、いずれもここ十年ほどの新しい発見であり、その年代や文化内容はまだ不明確であり、多くの考古学的調査が必要とされている。

3. 小屯宮廟区と王陵区は、商代晩期の王都の 2 つの中核をなす文化要素であるが、宮廟区は洹河の南に、王陵区は洹河の北にある。両者を結ぶメカニズムは、今後の探求における重要事項の一つとなろう。

4. 殷墟小屯宫殿宗庙区考古新发现和研究新进展

岳洪彬

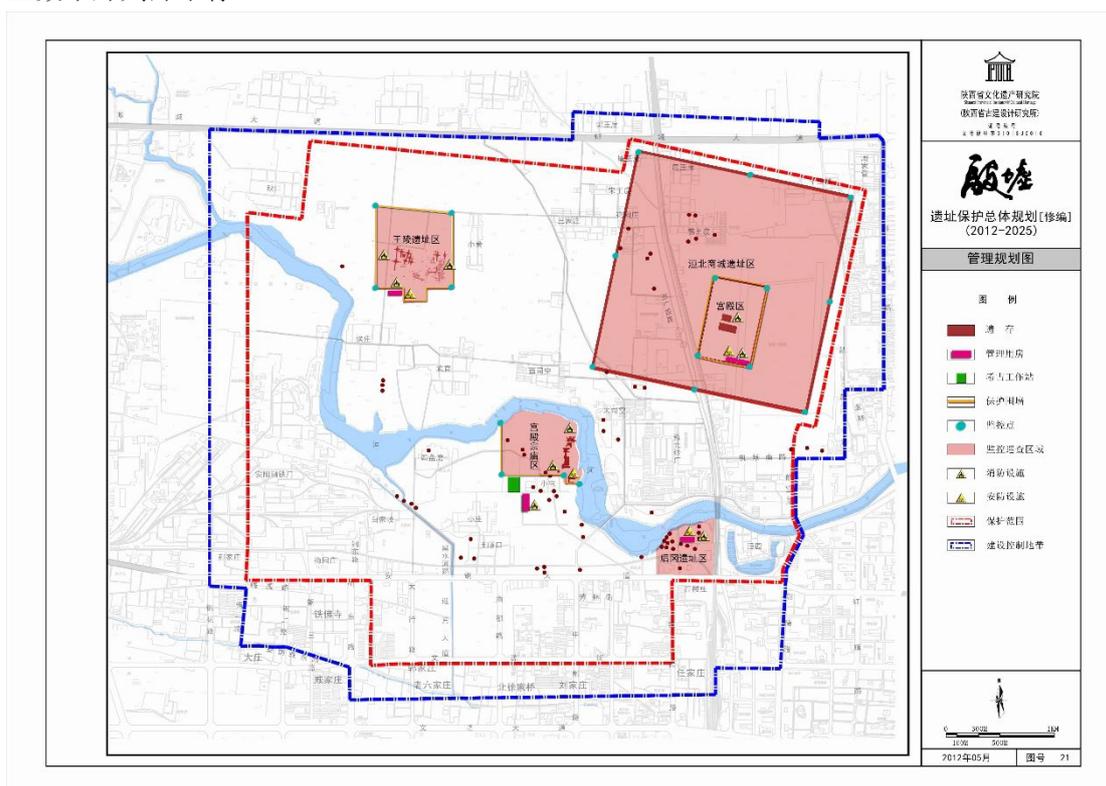
(中国社会科学院考古研究所研究员)

一、学术回顾

自 1928 年首启殷墟发掘，至今已有 90 余载，小屯宫殿宗庙区（以下简称“宫庙区”）一直都是学界关注的焦点（图一）。回顾 90 余年小屯宫庙区的工作，大致可分为以下四个阶段：

第一阶段，自 1928 年至 1937 年，史语所在殷墟进行了 15 次发掘，其中以小屯宫庙区为核心发掘区的就有 12 次（只有十至十二次发掘没在小屯进行）。主要收获有三个方面：一是清理了甲、乙、丙三组夯土建筑基址，学界普遍认为甲组基址是商王室的寝殿，乙组基址为朝堂，丙组基址为祭祀礼仪性建筑；二是清理了一大批祭祀性遗存和墓葬，出土大批青铜器、玉石器和陶范等；三是清理 YH127 甲骨坑，出土数万片刻辞甲骨。

第二阶段，1950-1976 年，中国科学院考古研究所郑振香和陈志达等先生，对小屯宫庙区进行两次集中勘探和发掘。主要收获有三方面：一是勘探发现作为小屯宫庙区防御性设施——大灰坑，并进行了局部解剖和试掘；二是发现和清理小屯 M5（即妇好墓）及其周围的居住址遗存，出土大批高规格的青铜器和玉器标本；三是在小屯南地清理若干集中出土刻辞甲骨的灰坑，出土数千片刻辞甲骨。



图一 殷墟遗址总平面图（采自《殷墟遗址保护总体规划（2012-2025）》）

第三阶段，1980 年代末-1990 年初，中国社会科学院考古研究所郑振香、杨锡璋和刘一曼等先生，对小屯宫庙区进行了 3 次规模较大的发掘。主要收获有：一是清理了“凹”字形夯土建筑基址群；二是清理了小屯 M18（即“子渔”墓）和 M17 等一批重要墓葬资料，出土一批青铜器和玉器；三是发现并清理了花东 H3 甲骨坑，出土数千片刻辞甲骨。

第四阶段，即自 2000 年以来的二十余年间，中国社会科学院考古研究所安阳工作队，主持对小屯宫庙区进行了大规模的勘探和重点试掘，取得了重要收获（下文详述）。

总的来说，第一阶段的考古收获最为重要，所发现的甲、乙、丙三组建筑基址是小屯宫庙区的核心内涵，第三阶段发掘的“凹”字形建筑基址，是前三组基址的补充。这四组建筑基址构成了小屯宫庙区的基本格局。

二、近二十年来小屯宫庙的考古收获

自 2000 年新世纪以来的二十余年间，小屯宫庙区进行的较为集中的考古工作有两期（图二）：前期，自 2000 年至 2005 年间，为配合村民住房改造和殷墟申报世界文化遗产在小屯宫庙区做了三项考古发掘：一是 2000 年在花园庄村东地发掘一批商代墓葬和居住址遗存，其中最为重要的是花东 M54 的发掘，出土一批精美的青铜器和玉器；二是 2002 年在小屯南路做了 450 米长的东西向解剖沟，发现大量灰坑、窖穴、水井、夯土房基和祭祀坑等居住址遗存，出土 200 余片刻辞甲骨；三是 2004-2005 年对小屯宫庙区甲、乙、丙、丁四组建筑基址及其周围区域进行了系统勘探，新发现近百座夯土建筑基址和池苑遗址，并对甲组基址西南部进行了重点发掘。



图二 小屯宫庙区池苑和核心岛的布局

后期，自 2019 年春至 2020 年秋，在小屯宫庙区进行了不间断的勘探和主动发掘，主要收获有四项：一是系统勘探了池苑遗存，基本搞清了池苑遗址的大致范围、堆积情况以及与周边遗存的关系；二是发现小屯宫庙区的核心区域，因其四面环水呈岛形，故本文称其为“核心岛”，该岛又被一条东西向沟渠分为南、北两部分，本文称为“北岛”和“南岛”；三是在甲组基址的北侧发现一条夯土墙；四是发掘乙二十建筑基址，确认其为四合院建筑群。

三、小屯宫庙区的布局新探索

通过前三个阶段的勘探和发掘，学术界基本可以确认，位于洹河南岸内转角处的小屯东北地，地势较高，是晚商时期的宫殿宗庙区，由甲、乙、丙和丁四组夯土建筑群组成，这些建筑基址周围分布着较多的祭祀性遗存和极为完善的地下排水系统；在妇好墓附近，分布着大量普通居住址遗存；在妇好墓东侧与丙组基址之间，发现一座疑似制玉作坊的半地穴房址。尽管如此，小屯宫庙区仍有大量考古人未知的空白区域，对宫庙区的布局格局仍无法明确；经过第四阶段的考古勘探和发掘，小屯宫庙区的布局逐渐清晰。

1、关于小屯宫庙区的范围

在殷墟二期末之前，宫庙区的范围应仅限于 1950 年代发现的大灰沟之内；在殷墟二、三期之际，随着王室成员的不断增多，宫庙区的规模也为断扩大，作为宫庙区防御设施的大灰沟废弃，

宫庙区应向大灰沟以西扩展。

2、关于池苑遗址和周围水系

池苑遗址最早发现于2004-2005年对宫庙区的系统勘探，2019-2020年对池苑遗址进行了专门勘探。池苑面积近5万平方米，最深处超过16米，远超当时的地下水位。其西北侧有水道与洹河相通，起到进水的作用；其东侧亦有水道与洹河相连，起到排水的作用；两水道近洹河处都有水坝设施，起到调节池苑水位的作用。池苑、进水道、排水道、洹河以及宫庙区内科学而复杂的地下排水系统，构成了小屯宫庙区较为完善的水网布局。

3、关于核心岛

早年所认识的甲、乙、丙、丁四组夯土建筑基址，虽然是宫庙区的重要内涵，但并不是核心。经过近二十余年的考古工作，发现在池苑遗址的北部，分布着一块高台地，平均海拔较甲、乙、丙三组建筑基址所在区域高1.5米，其北侧为洹河，西侧是池苑的进水道，南侧是规模宏大的池苑，东侧是池苑的排水道，呈四面环水的岛状，故我们称其为宫庙区的“核心岛”。该核心岛面积约3万平方米，北高南低，中部被一条连接池苑进水道和排水道的东西向沟渠分为南、北两部分，我们称其为“南岛”和“北岛”。

据勘探和发掘，核心岛上分布着大量夯土建筑，有些建筑倚河而建，性质特殊。据1970年代在核心岛上出土的殷墟唯一一件龙纹大石磬（长80余厘米）判断，该核心岛的规格较高，不排除为商王室核心成员居住生活之所。

4、关于夯土建筑基址群

小屯宫庙区内已发掘的夯土建筑有54座，若加上妇好墓和花东M54周围的小型夯土建筑，总数应接近百座。但这些远不是小屯宫庙区夯土建筑基址的全部。据勘探，小屯宫庙区内尚有百余座夯土基址已被探明，尚未发掘。宫庙区内仍有大面积的空白地，需要未来的考古工作去探寻。

5、关于甲组基址的性质

以前学术界普遍认为甲组基址是商王室成员的寝殿，经过近二十余年的勘探和发掘、研究，我们认为甲组基址应是王室控制的手工业作坊区，王室成员的寝殿另有他处，不排除在核心岛上的可能。

6、关于宫庙区中的手工业作坊

迄今为止，小屯宫庙区内已发现铸铜、制石、制玉、制骨、制蚌、整龟等多种手工业作坊的遗存，甚至不排除还有制陶的作坊等。说明商王室成员有自己控制的手工业作坊区。

综上所述，小屯宫庙区的布局具有如下特征：

- 1、宫庙区的选址，仍是延续商人惯用的理念，在洹河南岸内转角处规划建设王室族邑；宫庙区的布局，充分利用自然地势和水系，因地安宫置寝，因势挖池置苑，使自然与人文完美结合。
- 2、核心岛（包括南岛和北岛）是小屯宫庙区的核心区域，应是商王室重要成员的居住生活之所，原来发掘的乙、丙和丁组基址应是商王室的朝堂和宗庙，甲组基址应是手工业作坊区。
- 3、规模较大的建筑基址普遍分布池苑东侧和北侧的核心岛上，应是商王室重要成员所居之所；而池苑遗址的南侧普遍分布着规模较小的居住址，甚至还有半地穴式居所，应是商王族中低级成员居住之所。距池苑越近，居住者地位越高，距池苑越远，反之则较低。

四、存在的问题

- 1、小屯宫庙区新探出的百余座夯土建筑，尚没有发掘，宫庙区布局探索还有很长的路要走。
- 2、核心岛和池苑遗址均为近十余年来的新发现，对其年代和文化内涵尚不清楚，还需大量的考古工作去探索。
- 3、小屯宫庙区和王陵区是共同构建晚商王都的两大核心文化内涵，但宫庙区在洹南，王陵区在洹北，两者之间的连接机制将是未来探索的重点之一。

5.殷墟商代王陵区周辺の考古新収獲

牛世山

(中国社会科学院考古研究所研究員)

中国社会科学院考古研究所は、殷墟の考古調査と研究をさらに向上させ、殷墟国家遺跡公園の建設を推進するため、2021年から政府資金の支援を受け、殷墟内の重要遺跡を含む考古調査を計画・実施し、絶え間ない努力によってさらなる飛躍が期待されています。

これまでの研究成果を振り返ると、1990年代以降、殷墟では広・中・狭幅の3種の商時代後期の道路が発見されている。そのうち最も幅広い幹道(10m以上)としては横4本、縦2本があり、小屯宮殿区以南と大司空地区の東に見られる。殷墟西部すなわち現在の安鋼工場区から、安鋼大道と中州路との交差点の東に至り、さらに、北西から南東へ商時代後期の幹線水路とその支脈を伴い、その長さは2.7キロメートル以上に及ぶ。この道路と水路は、大邑商都である殷墟の空間的骨格を形成している。しかし、洹河北岸にある商王陵区を中心とした地域には、そのような重要な現象は見られず、この区域は未知である最大の「空白地」となっているのである。そこで、環河の北岸に目をつけ、商王陵区とその周辺の考古調査を実施した。その目的は第一に、小屯宮殿区と王陵区を結ぶ幹線道路を発見することで、第二には商王陵区の範囲を明確にし、その後、洹河北岸地区の機能区分を明らかにすることである。

2021年8月に始まった我々の調査は、2022年1月を区切りとした。今回の探査では、安陽考古工作站内にある殷墟遺跡の原点座標を基準に、RTK(Real Time Kinematic)により10m×10mのトレンチを配置し、調査区をカバーした。ボーリングは一般(1mまたは2m間隔の列状で、列間10m)と集中(1mまたは2m間隔)の2種を行った。前者は溝や道路などの大規模遺構の探査を目的とし、後者は部分区域の地下遺構(埋葬、祭祀坑、住居址、灰坑など)の詳細な情報を得るための方法である。現在までに、総探査面積は72,900平方メートルを超え、2つの周溝と460以上の祭祀坑が発見されるなど、重要な成果を上げている。

東側と西側の周溝は、それぞれ商王陵区の東側と西側の領域の外周を囲み、両者の間隔は40mである。東側の溝は、大墓と多数の祭祀坑を完全に囲んでおり、東西約246m、南北約236mのほぼ正方形をなす。西側は、大墓三面を囲むように北・東・南方向で発見されており、北側190m、東側230m以上、南側90mが確認されている。東側周溝の西面・南面の各中ほど、および西側周溝の東面中ほどに、一か所ずつ欠けがある。周溝内の堆積土は4層に分かれており、いずれも非常に細かい土質で自然堆積である。

460以上の祭祀坑が新たに発見された(これまでの調査・発掘で発見されたものは合計1484基であり、このうち1977・1978年の冬、東部地区のボーリング調査により約700の小墓が発見され、未発掘である。今回の検出総数は570基で、その中には過去に検出されたものも含む)。これらの形態は過去に発掘された殷墟時期の祭祀坑と基本的に同じであるが、少数は墓である。これらは、東部周溝の東側部分を中心にしており、その外側にはごくわずかしかない。また、部分的に明確な列をなして密に分布している場所もある。開口部は長さ2m、幅1m前後の長方形が多く、人骨も検出された。また、西側周溝南東隅の外側に長さ約3mの方形土坑、長さ3m前後の方形土坑および長さ28m・幅6mの方長方形土坑が見つかり、いずれも獣骨が確認された。ごく少数から殷墟文化の土器や青銅器の破片が出土した。

ボーリング調査の結果、商王陵区の東350m、南90mの範囲に商代晩期の遺物がほとんどない広い空白域が見つかった。この南側の境界はまだ見つかっていない。この区域は、商代晩期には一般人の占有が禁止されていたと推測される。

以上の他、古代の灰坑30基、竪穴土坑墓22基、磚室墓36基、洞室墓18基が発見された。竪穴土坑墓の特徴は、殆どが殷周時代のもと同じである。磚室墓のいくつかは東側周溝を切っており、以前の考古発掘によって漢代のものであることがわかる。洞室墓は隋唐時代のもと考えられる。

全体として、新たに確認された周溝は、大墓の周囲を取り囲んでおり、周溝と、殷墓や祭祀坑の間に上下・切り合い関係は見られず、晩期の墓だけが周溝と祭祀坑を切っている。東側周溝の東面・西面の北端は東にやや傾き、殷墟発見の商代建築の方向と一致している。複数の要素を統合的に考えると、この2つの周溝は商王陵区に関連していた可能性がある。これにより、商王陵区の東側境界が(東側周溝の東面を基準として)100m東に延長される。

今回の考古学的成果は、商王陵区構成についての認識を新たにし、商代陵墓の制度、ひいては商文化・歴史の研究に必然的に貢献し、また殷墟国家考古遺跡公園の建設に重要な新情報を提供するものである。



図1 商王陵区ボーリング調査現場



図2 商王陵区ボーリング調査現場



図3 商王陵区ボーリング調査現場



図4 商王陵区ボーリング調査サンプル



图5 商王陵区遺構分布図

5. 殷墟商王陵区及周边考古勘探新收获

牛世山

(中国社会科学院考古研究所研究员)

为了进一步做好殷墟考古工作和研究，推进殷墟国家考古遗址公园建设，2021年开始，在政府提供经费的支持下，中国社会科学院考古研究所规划和实施包括殷墟在内的重要遗址的考古工作，期望通过不懈努力，能够获得进一步突破。

梳理以往工作和研究可见，20世纪90年代以来，殷墟发现商代晚期的宽、中、窄三级道路，其中最宽的干道（超过10米）有四横两纵，发现于小屯宫殿区以南和东面的大司空地区；从殷墟西部、今安钢厂区到安钢大道与中州路交叉口之东，由西北向东南贯穿有商代晚期的干渠及其支渠，长度超过2.7千米，两者构成殷墟大邑商都城空间的骨干框架。但这样一些重要的现象，在洹河北岸以商王陵区为中心的区域都没有发现，这个区域成了未知的最大一片“洼地”。所以，我们将目光瞄准洹河北岸地区，开展商王陵及周边区域的考古勘探。工作目的首先是通过勘探寻找小屯宫殿区到王陵区之间的干道，其次是搞清商王陵区的范围，后续搞清洹河北岸地区的功能区划。

我们的工作从2021年8月开始，到2022年1月告一段落。本项勘探，以位于安阳考古工作站内的殷墟遗址坐标原点为基准，用RTK布10×10米探方，覆盖工作区域。钻探分普通钻探（两排间探孔距为10米，每排孔距1-2米）、重点钻探（孔距为1米或2米）两种。前一种方式是为了追寻大型遗迹如沟、道路，后一种是为了详细掌握部分区域地下文物（如墓葬、祭祀坑、房址、灰坑等遗迹）的详细信息。截至目前，勘探总面积已超过72900平方米，工作取得重要收获，发现围沟2个、祭祀坑460座以上，还获得其他一些重要信息。

东、西围沟分别围绕在商王陵东、西两区的外围，两者相距40米。其中，东围沟完全闭合，围绕在殷墟王陵东区的大墓和大量祭祀坑周围，东西间距约246米，南北约236米，形状近正方形。西围沟已发现北、东、南三段，围绕在王陵西区的大墓三面，已探明北段190米、东段超过230米、南段90米。东围沟西段中部、南段中部各有一个缺口，西围沟东段中部也发现一个缺口。围沟内填土分4层，土质都很细腻，为自然沉积而成。

新探祭祀坑460座以上（以往几次考古钻探和发掘共发现1484座，1977年冬和1978年冬在东区铲探出而未发掘的小墓还有700座左右。这次总探出570座，部分为以前探出）。形制与以往考古发掘的殷墟时期祭祀坑基本相同，不排除少数为墓葬。主要发现于东围沟的东段内，极少数在东围沟外；在部分区域明细成排密集分布。口多为长2米左右、宽1米左右的长方形，探出有人骨骨骼。此外，在西围沟的东南角外发现3米左右的方坑，还有长28米、宽6米的长方形坑；都探出有动物骨骼。极少数坑中探出殷墟文化陶器和青铜器等文物碎片。

钻探所见，在商王陵区以东350米、以南90米的范围极少商代晚期遗存，是一片大面积的空白区域，南界尚未找到。推测这个区域在商代晚期也被禁止一般人占用。

此外还发现古代灰坑30个、土坑竖穴墓22座、砖室墓36座、洞室墓18座。土坑竖穴墓特征多与商周时期墓葬相同。有的砖室墓打破东围沟，据早年考古发掘可知为汉代。洞室墓的时可能为隋唐时期。

总体来看，新探明的围沟围绕在殷商大墓外围，未见围沟与殷商墓葬、祭祀坑存在叠压或打破关系，只有晚期墓葬打破围沟和祭祀坑的现象；东围沟东、西段的北端偏向东，与殷墟发现的商代建筑的方向一致。综合多重因素看，两个围沟可能与商王陵园有关联关系。由此将商王陵区东界向东扩展100米（以东围沟东段为基准）。本次考古收获刷新了了对商王陵园的格局认知，必将推动对商代陵墓制度乃至商文化、商史的研究，同时，也为殷墟国家考古遗址公园的建设提供了新的重要资料。



图 1 商王陵区勘探现场



图 2 商王陵区勘探现场



图 3 商王陵区勘探现场



图4 商王陵区探孔土样



图5 商王陵区古代遗迹分布图

6. 殷墟白陶紋様の製作技術

岳占偉

(中国社会科学院考古研究所研究員、殷墟博物館副館長)

殷墟で出土した土器には、灰陶、紅陶、白陶、硬質陶器、原始磁器、施釉陶があり、灰陶が大半を占める。白陶は比較的少なく、王陵区大墓や宮殿宗廟区の大型墓や遺跡内に多い。一方で、他の族邑にはほとんど見られず、そのランクの高さが伺える。殷墟の白陶は、先人の高い製陶技術を受け継ぐだけでなく、形態や装飾を同時代の青銅器から借用し、独自のスタイルを形成した。そして、美的価値と芸術的魅力を大いに高め、質と工芸において、白陶史上最高のレベルとなったのである。殷墟で白陶が高度発達を遂げた内的要因は、殷の人々の白色尊重と関係があるにちがいない。『史記』「殷本紀」には「湯乃改正朔、易服色、尚白（湯王は位に立ち、服色変え、白を尊ぶ）。」「殷路車為善，而色尚白（殷の車は良く、色は白を尊ぶ）。」とあり、『礼記』「檀弓上」では「殷人尚白、大事斂用日中、戎事乘翰、牲用白（殷人は白を尊び、大事は白昼に行われ、軍事では白馬を用い、犠牲にも白色を用いた）。」とある。さらに『尚書大伝』「甘誓」には「殷以十二月為正，色尚白（殷は十二月を年始とし、白色を尊ぶ）。」とある。殷の人々が祭祀や日常生活において白色を尊んでいたことは、多くの文献から知られている。したがって、白陶が殷人の白色の尊重を体现するものとなって崇拜され、さらに、商王朝の貴族特に王族が好むものとなったことは当然の成り行きであった。また、白陶は青銅器と同等の重要な社会的地位を持つに至った¹。さらに白陶は、死者のための儀式において青銅器よりも高い地位を占めているのである²。

殷墟白陶には、豆、簋、盂、盤、壘、甗、卣、爵、斝、大口尊、尊、瓮、罐、器蓋、埴などがあり、そのほとんどが食器や酒器の盛器・貯蔵器として使われ、中でも酒器の占める割合が最も大きい。殷墟白陶の装飾は豊富であり、主には、饕餮紋、夔紋、龍紋、獸面人体紋、蟬紋、雲紋、雷紋、雷紋三角紋、雷紋折疊紋、斜角雲雷紋、勾連雲雷紋、斜方格雷紋、乳丁紋、円渦紋、弦紋、繩紋、附加堆紋などである。その中には、饕餮紋、夔紋、龍紋、蟬紋など、青銅器の紋様を借用したものもあるが、雷紋折疊紋、獸面人体紋など青銅器にはなく、殷墟白陶の独特のスタイルを形成している³。

殷墟の白陶の施文法のうち、主要であるのは刻紋である。李濟氏は、殷墟白陶の刻紋を次のように分類している。①押込紋（圧入紋）。毛のない筆先で器物表面に押し込み、多くは動物形をなす。②押刻紋（圧刻紋）。梁思永氏は、「いわゆる押刻紋は、陰紋（線）の断面が押し込み紋よりも尖っており、2本の斜刃で刻んだ後、尖った工具で再度押し込んだようである。」と述べている。③切開紋（劃劃紋）。紋様の線は浅く、曲線が多いが滑らかな線ではない。尖った先端の工具で切り込まれており、装飾は加えない。④彫刻紋（雕刻紋）。白陶の彫刻模様は殆どは、この方法によって完成する。線の幅や深さは不揃いで、線の角部も四角や丸であるが、これらは図案に従って変化している⁴。鄭振香氏も殷墟白陶の装飾を詳細に観察し、精密に彫る前に図案の輪郭を細浅く描き出していることを示した。全ての紋様の組み合わせにおいて、各单位内に中心分割の線があるため、綿密にデザインされてい



1. 1978AHBM1: 049a-1 (50倍)



2. 1978AHBM1: 049a-1 (100倍)

図1 殷墟白陶表層のガラス化「皮」

ることがわかる。輪郭線の観察から、紋様の多くは陶器が乾燥した後に彫られたと思われる⁵。

李濟氏、鄭振香氏が殷墟白陶に施した施文法について行った観察は、その殆どが正しいことは間違いない。報告者は、殷墟白陶に施された刻紋について、顕微鏡観察により新たな知見を得た。殷墟出土の白陶数片に施された刻紋を高倍率の顕微鏡で観察したところ、刻紋は後刻、つまり焼成後の白陶に刻紋が施されていることが判明した。以下に実例を示したい。

殷墟白陶の焼成温度は、おおよそ900～1000度である⁶。このような高温下では、陶器の表面が溶けて、ガラス質で少し光沢のある「皮」が一層形成される(図1)。

しかし、殷墟白陶の刻線の溝にはガラス化した「皮」が見られないだけでなく、白陶内部の胎土が完全に露出しており、溝の外側にはやや光沢のあるガラス化した「皮」が見られる(図2)。これは、これらの刻紋が白陶焼成後に彫られたことを証明するものです。もし、白陶の焼成前に刻紋が彫られた場合、刻まれた溝内部はその外側と同様に高温で溶けて、ガラス化した「皮」を形成し、白陶の胎土は露出しない。



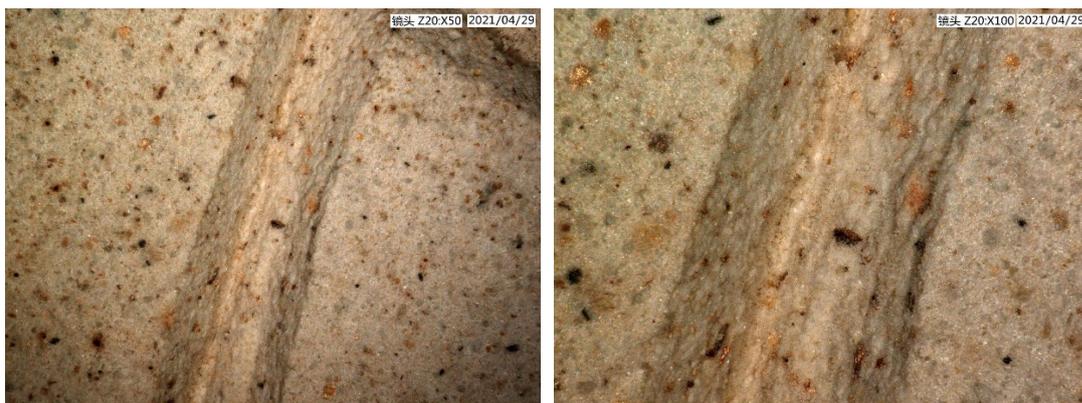
1.1978AHBM1 : 049a-2

2.2021ASH1974 : -1

図2 殷墟刻紋白陶における刻溝内外の対比

仮説を検証するため、太行山からカオリン土を採取して白陶を作り、乾燥後に彫刻を施した後、「サヤ」に入れて窯焼成した。焼成実験の結果、白陶刻紋における溝の内外にガラス化した「皮」が一様に形成された(図3)。この実験により、殷墟白陶の刻紋は焼成後に入れられたものであることが反証された。

なぜ、殷の工人は白陶を焼成後、彫刻することにしたのだろうか?その主な理由は、殷墟の白陶の彫刻紋様は殆どが青銅器の装飾を借用したもので、青銅器の装飾のように鮮明で



1. (50倍)

2. (100倍)

図3 現代実験による刻紋白陶

立体的な彫刻が必要であり、その効果を得るためには、焼成後に彫刻をするのが最適であったからだと考えられる。これは、焼成された白陶は一定の硬さがあるため、刻線の稜や角がより鮮明になること。そして、紋様線の外側はガラス化した皮で覆われる一方、溝内部は白陶胎土本来の色であるため、両者のコントラストが鮮明で、立体感のある装飾になるからで

ある(図4-1)。逆に、彫刻後に焼成した実験の結果では、未焼成白陶は彫りやすいものの、硬さが低く、装飾を刻む際に刀子で触れた部分が剥がれやすく、刻線が不規則になる。また、焼成中の高温溶融により、線の稜や角がはっきりしない。さらに、紋様溝内外が全てガラス化し、装飾内外の色のコントラストもシャープでなく、立体感が乏しくなる(図4-2)。

当然ながら、殷墟白陶の焼成後の彫刻制作では一つの条件すなわち、より適した彫刻工具が必要となる。殷墟白陶の硬度は通常モース硬度4.5°以下⁷であるが、殷墟で出土した青銅や玉の彫刻刀は通常モース硬度6°前後であり、殷墟白陶の硬度より高く、これらの彫刻



1.殷墟白陶(2021ASH1974:-27) 2.実験白陶

図4 殷墟白陶と実験白陶の刻線の対比



1.青銅銅刻刀(1961APNM22:1) 2.玉刻刀(1994ALNM837:13)

図5 殷墟出土の青銅刻刀および玉刻刀

用に完全に適合するものである(図5)。

総じて、殷墟白陶の刻紋は、焼成後施されたということで間違いないと考えられる。

¹ 谷飛 1991「殷墟白陶研究的幾個問題」『考古』1991年第10期

² 李濟 1977「殷墟白陶發展之程序」『李濟考古學論文集』(下冊)、聯經出版事業公司出版

-
- ³ 中国社会科学院考古研究所編著 1994『殷墟的発現与研究』 pp.230-231、科学出版社
- ⁴ 李济 2006『李济文集』（卷三）、pp.176-196、上海人民出版社
- ⁵ 中国社会科学院考古研究所編著 1994『殷墟的発現与研究』 p.230、科学出版社
- ⁶ 梅原末治 1932『殷墟出土白色土器の研究』 p.42、東方文化学院京都研究所
- ⁷ a 李济 2006『李济文集』（卷三）、p.92、上海人民出版社
b 梁思永、高去尋 1962『侯家莊第二本 1001号大墓』上冊、pp.335-352、歴史語言研究所
c 中国社会科学院考古研究所編著 1994『殷墟的発現与研究』 p.192、科学出版社

6. 殷墟白陶刻划纹饰的制作方法

岳占伟

(中国社会科学院考古研究所研究员, 殷墟博物馆副馆长)

殷墟出土的陶质类遗物有灰陶、红陶、白陶、硬陶、原始瓷、釉陶等,以灰陶为大宗,白陶相对甚少,且绝大多数出自王陵区大墓和宫殿宗庙区较大型墓及遗址内,其他族邑几乎不见,足见其等级之高。殷墟白陶不仅很好继承了前人高超的制陶技术,而且在器型和纹饰上还充分借鉴同时期的青铜器,形成了自己独特的风格,极大提高了其审美价值和艺术魅力,使其品质和工艺均达到了历代白陶的最好水平。殷墟白陶高度发展的内在原因应与殷人崇尚白色的观念有关。《史记·殷本纪》:“汤乃改正朔,易服色,尚白。”，“殷路车为善,而色尚白。”;《礼记·檀弓上》:“殷人尚白,大事敛用日中,戎事乘翰,牲用白。”;《尚书大传·甘誓》:“殷以十二月为正,色尚白。”。从诸多文献可以看出,殷人无论祭祀,还是日常生活,都崇尚白色,故白陶器自然而然就成为了殷人崇尚白色的实物载体而倍受推崇,成为了商王朝贵族尤其是国室喜好的物品,具有与青铜礼器同等重要的社会地位¹,且在为死者安排的仪式顺序上,白陶显比铜器更占高贵的地位²。

殷墟白陶的器形有豆、簋、盂、盘、壘、甗、卣、爵、斝、大口尊、尊、瓮、罐、器盖、埴等,其用途大多数是食器、酒器和盛贮器,而酒器占比最大。殷墟白陶的纹饰丰富多彩,主要有饕餮纹、夔纹、龙纹、兽面人体纹、蝉纹、云纹、雷纹、雷纹三角纹、雷纹折叠纹、斜角云雷纹、勾连云雷纹、斜方格雷纹、乳丁纹、圆涡纹、弦纹、绳纹、附加堆纹等,有些纹饰借鉴了青铜器的纹样,如饕餮纹、夔纹、龙纹、蝉纹等;而雷纹折叠纹、兽面人体纹等不见于青铜器上,形成了殷墟白陶的独特风格³。

殷墟白陶的施纹方法,以刻划纹饰为大宗。李济先生对殷墟白陶的刻划纹饰进行了分类:①压入纹,即以秃尖笔压入器物表面,多作动物形。②压刻纹,梁思永云:“所谓压刻者,阴纹(线路)之横断,较压入纹为尖,似为两斜刀刻后,再用突尖器加压”。③劂划纹,纹路浮浅,多曲条但曲线并不顺利,大约用尖头器刻划,不加修饰者。④雕刻纹,大部分的白陶所具的刻划纹饰都由此法完成,线条有宽窄深浅之不同,转角处或方或圆,皆随图案变化⁴。郑振香先生也对殷墟白陶纹饰进行了仔细观察,得知在精刻之前,先要勾出细而浅的图案轮廓线。举凡成组的纹饰,各单元花纹之内都有一条分界的中线,由此不难看出,白陶上的花纹是经过周密设计的。从轮廓线观察,花纹大概是陶坯晾干后刻上去的⁵。

李济、郑振香两位先生对殷墟白陶施纹方法的观察,大多无疑是正确的。我们通过显微观察,对殷墟白陶的刻划纹饰有了一些新认识。我们把殷墟出土的数片白陶的刻划纹饰放在高倍显微镜下观察,发现这些刻划纹饰是后刻的,即纹饰是在烧制好的白陶器上刻划的。下面以实例论之。

殷墟白陶的烧成温度大致在900-1000度之间⁶。在如此高温下,白陶的表层多已熔融,形成一层玻璃化且微发亮的“皮壳”(图一)。



1. 1978AHBM1: 049a-1 (放大 50 倍)

2. 1978AHBM1: 049a-1 (放大 100 倍)

图一 殷墟白陶表层的玻璃化“皮壳”

但是殷墟刻纹白陶的刻槽内不但没有发现玻璃化的“皮壳”，而且还完全暴露出了白陶内部的胎体；刻槽外为微发亮的玻璃化“皮壳”（图二）。这足以证明这些刻划纹饰是在白陶烧制后刻划上去的，这是因为如果是在白陶烧制前刻划的纹饰，其刻槽内经过高温，与刻槽外一样也会熔融，且形成玻璃化的“皮壳”，不会暴露出白陶胎体。

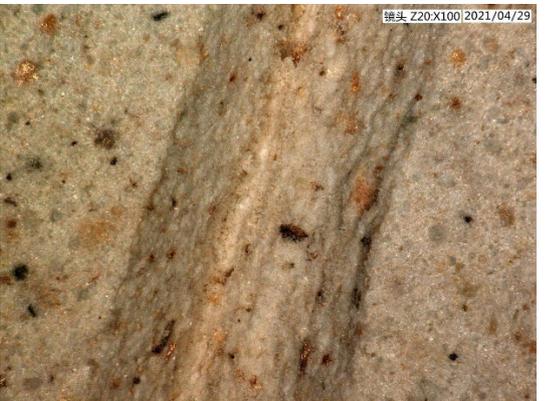
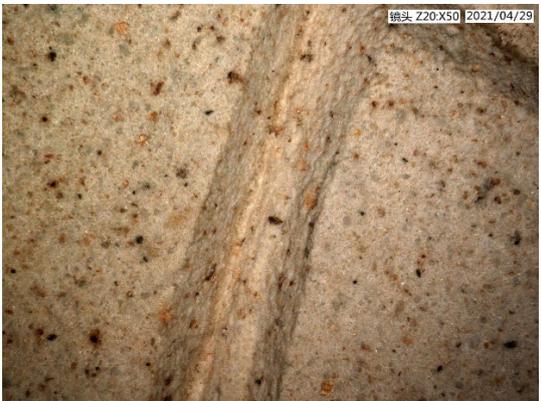


1. 1978AHBM1: 049a-2

2. 2021ASH1974: -1

图二 殷墟刻纹白陶的刻槽内外对比

为了验证我们的推断，我们从太行山上采集了一些高岭土，制作了一些白陶，在阴干后烧制前刻划了一些纹饰，最后装进“匣钵”入窑烧制。烧制实验结果是，我们制作的刻纹白陶的刻槽内外均形成了玻璃化的“皮壳”（图三）。这个实验反向证明了殷墟白陶的刻划纹饰是在烧制后刻划上去的。



1

2

图三 现代实验的刻纹白陶（1. 放大 50 倍；2. 放大 100 倍）

商代工匠为什么对殷墟刻纹白陶会选择先烧后刻的制作工艺，我们认为主要原因是殷墟白陶的刻划花纹多是借鉴青铜器纹饰，故刻划纹饰要像青铜器上的纹饰一样达到线条分明、立体感强的效果，刻纹白陶若要达到此效果，最好是先烧后刻，这是因为烧制好的白陶有了一定的硬度，刻划出的纹饰线条棱角比较分明，而且花纹刻槽外玻璃化、发亮，刻槽内为白陶胎体原色，二者对比鲜明，纹饰立体感强（图四，1）；反之，我们做了先刻后烧的白陶实验，结果表明：未烧制的白陶虽然容易刻划，但是由于其硬度低，刻划纹饰时刀口所到之处容易剥落，致使纹饰线条不规整，而且因为烧制过程中高温熔融，致使纹饰棱角不分明，还有因为花纹刻槽内外皆已玻璃化，纹饰内外色差对比不鲜明，致使纹饰立体感也较差（图四，2）。



1. 殷墟白陶（2021ASH1974： -27）

2. 实验白陶-2

图四 殷墟白陶与实验白陶的刻划纹饰对比

当然，殷墟白陶的先烧后刻的制作工艺还具备一个条件，即比较合适的刻划工具。殷墟白陶的硬度多在莫氏 4.5° 以下⁷，殷墟出土的青铜刻刀和玉质刻刀硬度一般在莫氏 6° 左右，高于殷墟白陶的硬度，故完全能够满足殷墟白陶刻划纹饰的需求（图五）。



1. 青铜刻刀（1961APNM22： 1）

2. 玉刻刀（1994ALNM837： 13）

图五 殷墟出土的青铜刻刀和玉刻刀

总之，殷墟白陶的刻纹纹饰的制作工序是先烧后刻应该是没有问题的。

-
- ¹ 谷飞：《殷墟白陶研究的几个问题》，《考古》1991年第10期。
- ² 李济：《殷墟白陶发展之程序》，《李济考古学论文集》（下册），联经出版事业公司出版，1977年。
- ³ 中国社会科学院考古研究所编著：《殷墟的发现与研究》，第230、231页，科学出版社，1994年。
- ⁴ 李济：《李济文集》（卷三），第176-196页，上海人民出版社，2006年。
- ⁵ 中国社会科学院考古研究所编著：《殷墟的发现与研究》，第230页，科学出版社，1994年。
- ⁶ 梅原末治：《殷墟出土白色土器の研究》，第42页，东方文化学院京都研究所，1932年。
- ⁷ a 李济：《李济文集》（卷三），第92页，上海人民出版社，2006年。
b 梁思永、高去寻：《侯家庄第二本·1001号大墓》上册，第335-352页，历史语言研究所，1962年。
c 中国社会科学院考古研究所编著：《殷墟的发现与研究》，第192页，科学出版社，1994年。

7. 王墓からみた商代後期王権と社会変動

内田純子・溝口孝司

(台湾中央研究院歴史語言研究所副研究員)(九州大学大学院比較社会文化研究院教授)

1. はじめに

『古本竹書紀年』の上では、商代の盤庚が殷へ遷ってから武王に滅ぼされるまで 773 年とされているが、『夏商周断代工程』の研究(夏商周断代工程専門家組 2000)によると、盤庚遷殷が B.C. 1300 年ごろ、武王滅殷が B.C. 1046 年という説が唱えられており、その間 250 年ほどと考えられている。

殷墟期の商王朝は、膨張と勢力拡大の一途をたどったという理解がなされている。確かに、殷墟(大邑商)は拡大の一途を辿ったことが明らかになってきているようだが、王朝はずっと安泰だったのか?そして、突然周族に滅亡させられたのか?本稿では、西北岡王陵区の王陵出土遺物、その他の状況から商王朝の実態を探ってみたい。

2. 西北岡王陵出土遺物の変遷

(1) 王墓の比定(図1)

内田と溝口は、西北岡王陵区の王墓出土の骨柶と青銅器を主とする型式変化に基づいて、王墓の順序と、該当する王名を推定した(Mizoguchi & Uchida 2018)。婦好が最盛期の王、武丁の配偶ということは周知のことであるが、1400号大墓(HPKM1400)とその真南に作られ、司母戊鼎が出土した 84AWBM260 の出土遺物は、婦好墓と時期が一致することから、それぞれ武丁、妣戊の墓であると推定した。また、それに伴って、歴代の商王を前後に位置づけられる王墓に比定した。

(2) 骨柶の退化と工匠群の縮小(図2)

靴ペラのような形状の骨柶は、主に動物の肋骨を使用して作った器物である。柄に当たる部分に描画、彫刻や象嵌による装飾が施される骨柶は、今のところ西北岡王陵でしか出土しておらず、王家特有の器物であったと考えられる。HPKM1001 の骨柶は、紋様のモチーフも豊富で、デザインや彫刻にも数種類の彫り方があって、非常に精巧に作られている。彫り方、デザインが異なることから、工匠(群)が異なっている、すなわち複数の工匠群が製作に当たっていたと考えられる。これに対して、殷墟二期相当の諸墓出土骨柶は、紋様パターンが2種類に固定化し、彫刻も浅くて彫り損じも増え、平面的になっていく。殷墟三-四期には、平面化して輪郭のみを彫るデザインのもの、前段階と同じデザインでも立体彫刻がなくなるなどの変化が起こる。特に殷墟三期の HPKM1003 以降の退化が著しい。このことから、王墓用の骨柶を製作する工匠の技術力や創造力が次第に退化したと推測される。

(3) 玉器(図4)

殷墟早期の玉璧には帯領式と無領式の2種類があって、玉の色合いも異なり、また研磨痕も異なっていて、製作技法も異なっていることが推測される。そのうち、主にアイボリー色の帯領式は、現在のところ HPKM1443 以前には副葬されていない。筆者は遷殷以降に殷墟へと伝来したと推測する。HPKM1443 や小屯丙一基壇下層出土の玉璧は、アイボリー色の帯領式玉璧と緑色の無領式玉璧が出土していて、この時期に両者が故意に使用されていたとわかる。また、両者の製作痕跡は異なり、玉材・製作方法が異なる。荊・唐氏らは帯領式玉璧を南方から搬入したと推測している(荊・徐・何・唐 2007)。しかし、殷墟三期の HPKM1003 以降、アイボリー色の帯領式玉璧がみられなくなり、HPKM1500 や HPKM1217 では蛇紋岩製の仮玉の璧が出土している。王朝の所持する玉材も枯渇し、王朝の権威が急激に低下したと考えられる。

(4) 大理石製品(図3)

小屯宮殿区丙区 YM331 では、後石家河文化の神面玉像が出土し、また乙区出土の大理石神面飾も後石家河文化の玉像に類似するデザインである。それらの表面の紋様は、凸線と立体的な浮彫状彫刻で表されている。HPKM1001 などで出土する殷墟初期の大理石製品も、同様の凸線による彫刻が施されるものがあり、後石家河文化の彫刻技術を取り入れた

のではないかと推測できる。HPKM1001では大理石製の虎像が発見されているが、それと同じ形状の石製虎像は、HPKM1550においても発見されている。しかし、その彫刻や石質は、明らかに劣っている。その後の大墓で出土した大理石製品は、総じて小型化し、造形も単純化している。また、単純な凹線による彫刻が通有となり、退化していくといえる。

(5) 青銅器

青銅礼器が出土している大墓は、HPKM1001、HPKM1550、HPKM1400、HPKM1004、HPKM1003のみで、他の大墓は盗掘により持ち去られたのか、礼器は出土していない。周知のように、HPKM1001では、大型の盃3点（現根津美術館蔵）や、数点の通常サイズの青銅礼器が出土している。その他の武器などのサイズや装飾から見ても、同様の大型器が副葬されていたことは想像に難くない。HPKM1400の真南に位置するM260からは、司母戊鼎が出土しており、それと同時期の殷墟二期に相当する大型青銅礼器がコレクション資料に散見されるので、それがHPKM1400出土器ではないかと推測している。

HPKM1004からは、盗掘から免れた牛鼎・鹿鼎が出土している。このように大型の青銅彝器が他にも副葬されていたであろう。HPKM1003から出土した緑松石象嵌の方尊破片は、ごく一部であるが、現存しない緑松石象嵌の大型青銅彝器が、殷墟三期に存在し、王墓に副葬されていたことを知らしめる貴重な資料である。一方で、HPKM1001やHPKM1400、HPKM1004の大型青銅器に匹敵する殷墟三期～四期の大型青銅器は、世界のコレクション資料にはごく少ないのに加えて、王墓に副葬されていた青銅器の実態は推測が困難である。

(6) 青銅器の種類の変化(図5)

王墓に限らず、殷墟の青銅器全体の時期的な流れについて、ここで述べておきたい。筆者は、二里頭期に始まる青銅彝器は、まず酒を温めるための爵と罍から発達したことに注目し、宮本一夫(宮本2005)、岡村秀典(岡村2008)らの指摘する(夏)商王朝の核心的な政治行為となった「礼制」とは、小南一郎(小南2001)のいうように「醴」(あまぎけ)を温めて共飲する儀礼であったのだろうと推測している(内田2013)。醴は癖のある飲み物で、通常、温めるか冷やすかして飲むためである。二里頭期には、表面に饗饗紋をつけ、あらたに盛酒器の尊と、飲酒器の觚が加わって、醴酒を用いた儀礼の道具が整えられた。これらの器種には、最も神聖な紋様「饗饗紋」をつけている。饗饗紋は、醴酒の儀礼に関わる神像だったのであろう。醴酒はアルコール度が低く、保存することはできないので、尊は口が大きく開いていて保存用の容器ではないはずである。ところが、二里岡上層期から、有蓋で頸部のすぼまる卣が登場する。卣は、醴酒ではなくアルコール度の高い酒を保存するための容器である。こうした背景を踏まえて王墓や王族に相当する婦好墓の副葬品を概観すると、殷墟二期までは、饗饗紋をつけた醴酒の儀礼のための青銅器が最も重視されていたといえる。また、殷墟一期までの青銅器には実際に煤がついて、酒を温めた痕跡が残っている爵や罍がみられる。それに対して、徐々に卣が増加し、殷墟三期以降には、さまざまな卣が多数みられるようになる(岳洪彬2007)。殷墟期当初は卣の紋様は、饗饗紋がつけられていない。しかし、三期以降には饗饗紋も加わるようになり、醴酒の儀礼用の彝器の理念が忘却されていったことを示している。爵觚を除き、醴酒の儀礼に欠かせなかった尊と罍の数が減少して、卣や觶などの新しい酒器と入れ替わっていく。このことは、醴酒の儀礼を中心とした礼制が次第に崩壊していったことを示しているのではないだろうか。爵と觚は、殷墟で発見される氏族墓地の中小墓からも発見されることがあり、威信具として残存し続けたと考えられる。世界のコレクション資料においても殷墟後半期に属する尊などの大型器が激減していることは、単に盗掘の末に失われたことだけが原因ではなく、醴酒の儀礼自体の衰退を物語っているのではないだろうか。

(7) 王墓副葬品の退化について

王墓は、激しく盗掘に遭っている物がほとんどなので、出土遺物がごく限られている。しかし、現存する遺物の情報をつなぎ合わせて、復元を試みても、決して右肩上がりとその副葬品が豪華で多数になっていくことはなく、むしろ、骨器や玉器にみられたように、技術力やバリエーションが退化していったり、玉材が枯渇したり、殷墟二期までに安定して供給されていた南方の玉器が減少していく。殷墟二期を境として、衰退していくような状況が垣間見える。このことは、以下の章にて述べるいくつかの事象とも関連する。

3. 華中地域の文化

1986年に二つの祭祀坑が発見され、青銅神像をはじめとする青銅器や玉器などの独特な

文化が注目を浴びた三星堆遺跡では、筆者のいう「華中型青銅器」が出土している。2020年から再度の発掘調査により、新たに六つの祭祀坑が発見されている。筆者は尊などの典型的な華中型青銅器は、最終型式が殷墟二期に相当すると推定している（難波 2000、蘇榮譽・李建毛 2017）。そして、この三星堆遺跡は、突然断絶する。一方、江西省の新干大洋州遺跡に代表される吳城文化もまた、殷墟二期で一度衰退し、殷墟四期末に相当する吳城文化三期に再び復興をみる（江西省文物考古研究所・樟樹市博物館 2005）。新干大洋州遺跡の青銅器は、殷墟一～二期に相当する特徴を備えており、殷墟二期までの殷墟との密接な交流が看取できるのにもかかわらず、高度に栄えていた文化が突然衰退する点は、三星堆遺跡と同様である。

青銅器に含まれる鉛同位体比の分析では、四川省や雲南省付近で産出する高放射射成因鉛が、中原の青銅器に入っていることが指摘されているが、殷墟二期を境にして殷墟青銅器に含まれる高放射射成因鉛の量が激減し、殷墟四期の殷墟青銅器にはほぼ見られなくなる（金正耀ほか 1998）。このことから、三星堆遺跡を中心とした四川省との交易が、殷墟二期を以て途絶えたと推測することができる。

さまざまな事象を勘案すると、殷墟二期に、何か重大な事項が発生して、殷墟と南方との交易が突如途絶えてしまった、あるいは衰退してしまったと推測することができる。そして、殷墟の王墓の副葬品が殷墟二期を以て衰退するようにみえることも、その現象と関連があるのではないだろうか。

4. 古典文献の記述

『古本竹書紀年』や『史記』には、殷墟晩期の各王の治世について記述がある。最盛期の武丁については『史記』の記述が多いが、『竹書紀年』では失われていて少ない。その中でも目を引くのが武乙以降記述の増加で、例えば「武乙即位，居殷。武乙三十五年，周王季伐西落鬼戎，俘二十翟王。」など、周人の活躍の記述が多くなる。おそらくこの時期から文武丁、帝乙に至るまで周人についての記述が増加することは、周人が商を意識しておこなう活動が活発化したことを示しているのであろう。南方の長江流域の文物が殷墟三期以降流入しなくなることから、商王朝は黄河流域の東西の住民との交流や活動を活発化したと推測され、甲骨卜辞にそうした地域との衝突の記述が増加する事象ともまさに符合する。一方で、筆者が武乙、文武丁の墓と推測する王墓 HPKM1500 と HPKM1217 は、副葬品の内容が貧弱であった可能性が高いのに墓道が長大化しており、虚栄を誇ったのではないだろうか。

5. 結語 — 殷墟二期に南方の文化が突然衰退する理由

殷墟二期を境に、伝統的な酒器が衰退してしまう現象は、醴酒の儀礼が衰退してアルコール度の高い酒が一般的になったことが理由とも考えられるが、長江流域に栄えた地方文化が一時的に衰退することなどの現象とも符合することから、筆者は、醴酒の原料である米が流入しなくなったことが原因と推測する。そして、それは、そのほかの事象—すなわち、銅や鉛などの青銅原材料や、帶領玉の流入が途絶えることとも時期が符合する。それでは、突然に長江流域の地方文化が衰退する原因はなんだろうか。可能性のひとつとして、気候変動と関係するのではないかと推測する。

気候変動は人間社会にも大きな影響を与えることは最近の情勢でも広く知られている。日本においても火山噴火により一時的に寒冷化した 1993 年には、米不足が発生して社会的な大問題となった。Y.T. Hong らの 2004 年に発表した $\delta^{13}C$ の変動に関する論文では、エルニーニョ現象による炭素同位体の比率が変動することに着目して過去 12000 年間の気候変動状況を推定している（Hong ら 2004）（図 6）。それによると、紀元前 1200 年ごろに急速に気候が変動して一時的に寒冷化したことが推測される。突然の文化の衰亡と、商代社会の変動と気候の関連性について、今後も検討を重ねる必要がある。

商王朝は、全般に国力が安定していたかのような印象で語られることが多いが、殷墟の各遺構や遺物の動態は、決して盤石な地盤の上に安定的に発展した国家ではなく、さまざまな要因が作用し合って、様々な反応をおこしていたと考える。大邑商の継続的な発展と繁栄の裏で、王朝の権威が失墜し、殷周革命へと突き進んでいったことは必然だったのではないか。継続して発掘される殷墟の諸遺跡の成果をもふまえつつ、注意深くその変容を解明していきたい。

<参考文献>

岳洪彬 2007『殷墟青銅礼器研究』中国社会科学博士論文文庫、北京:中国社会科学出版社
夏商周断代工程專家組 2000『夏商周断代工程 1996-2000 年階段成果報告』北京:世界圖書

出版公司

金正耀·W.T.Chase·平尾良光·馬淵久夫·楊錫璋·三輪嘉六 1998「中国兩河流域青銅文明之間的連繫—以出土商青銅器的鉛同位素比值研究結果為考察中心」『中国商文化國際學術討論會論文集』北京：中国大百科全書出版社、p.425-433.

荊志淳·徐広徳·何毓靈·唐際根 2007「M54 出土玉器的地質考古学研究」（中国社会科学院考古研究所『安陽殷墟花園莊東地商代墓葬』北京：科学出版社.p.345-387.

江西省文物考古研究所·樟樹市博物館 2005『吳城 1973-2002 年考古發掘報告』北京：科学出版社、p.407-410

蘇榮譽·李建毛 2017「華容大口折肩青銅器研究—兼及挂飾管形犧首諸器」『美術研究』2017-1

内田純子 2013「商代的酒器与青銅礼器」（陳光祖主編『金玉交輝：商周考古藝術与文化論文集』台北：中央研究院歷史語言研究所、p.69-92

岡村秀典 2008『中国文明 農業と礼制の考古学』京都:京都大学學術出版会. p.93-97.

小南一郎 2001「飲酒禮と裸禮」『中国の禮制と禮学』京都：朋友出版社

難波純子（向桃初訳）2000「華中型青銅彝器的發達」『南方文物』2000-3、p.26-41

宮本一夫 2005『中国の歴史 01 神話から歴史へ』東京：講談社、p.311-316

Koji Mizoguchi&Junko Uchida.2018,The Anyang Xibeigang royal tombs revisited:a social archaeological approach.Antiquity(June, 2018), p.709-723.

Y.T.Hong, B.Hong, Q.H.Lin, Yasuyuki Shibata, Masashi Hirota, Y.H.Xhu, X.T.Leng, Y.Wang , H.Wang, L.Yi, 2005 Inverse Phase oscillations between the East Asian and Indian Ocean summer monsoons during the last 12,000 years and paleo-El Niño, *Earth and Planetary Science Letters* 231, p337-346

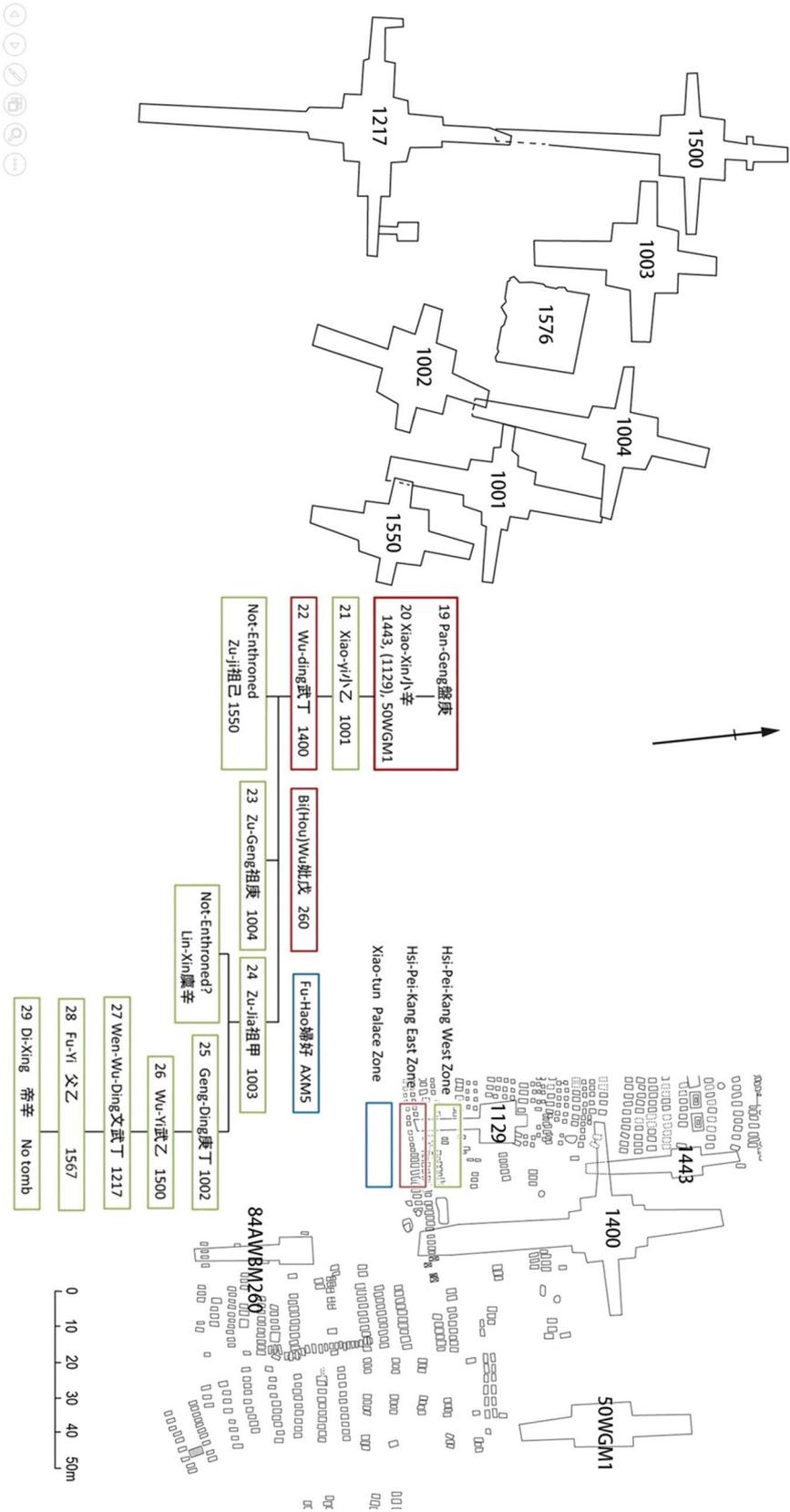


图 1 殷墟西北岡王陵区王墓分布图

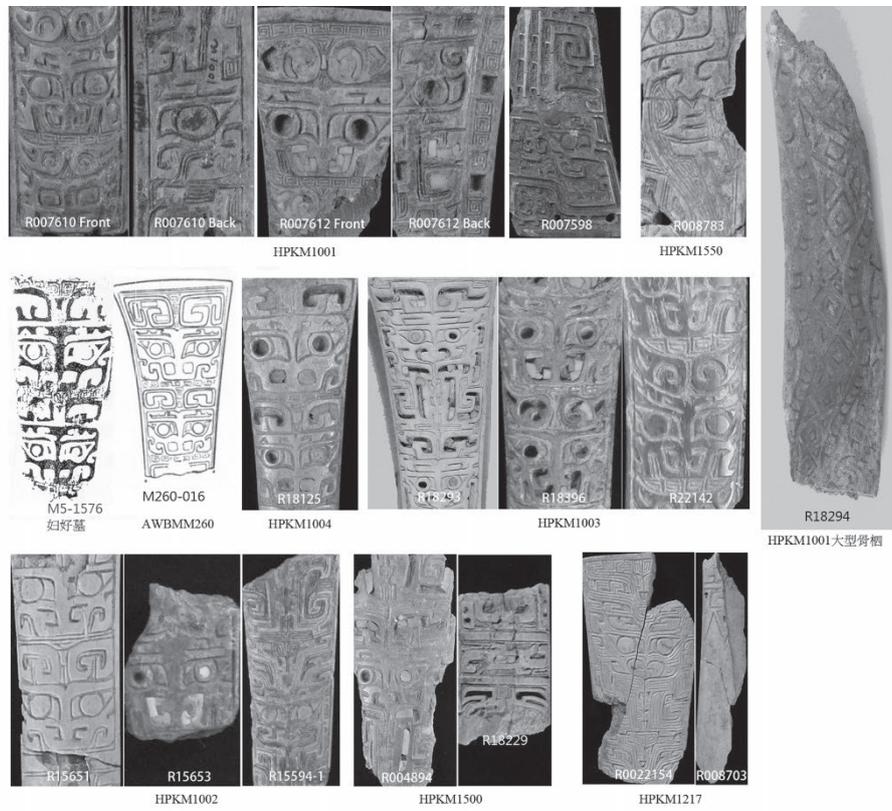


図2 諸王陵出土の骨柩



図3 大理石製品の彫刻技法

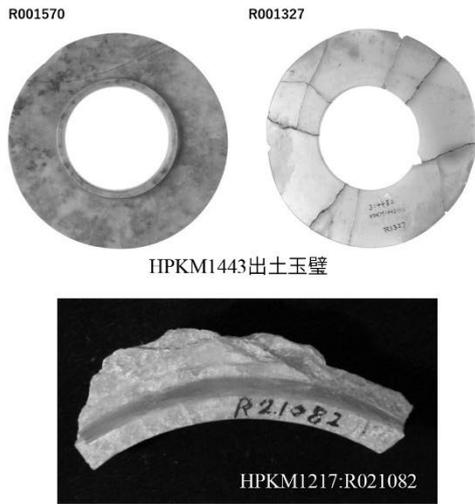


図4 玉器の退化

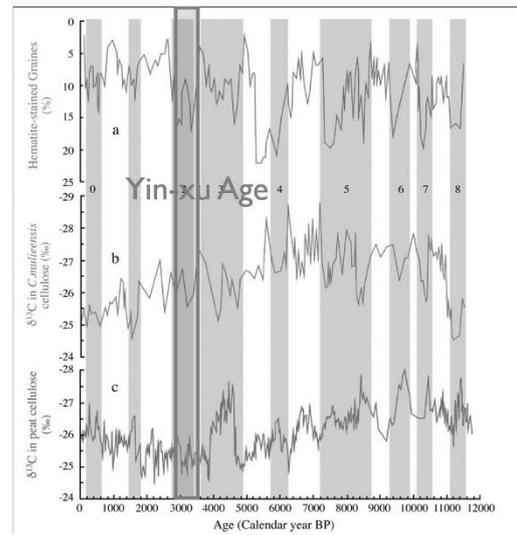


図6 気候変動 (Hong等2004より)



図5 青銅酒器セット (二里岡期)

7. 从王墓来看商代晚期的王权和社会变迁

内田纯子·沟口孝司

(台湾中央研究院历史语言研究所副研究员)·(九州大学大学院比较社会文化研究院教授)

1. 序言

《古本竹书纪年》上有提到，商代自盘庚迁都至纣被武王消灭的期间为 773 年。但是，根据夏商周断代工程的研究¹，盘庚迁都为公元前 1300 年左右，武王灭商为公元前 1046 年左右。这一期间大概历经 250 年左右。

殷墟期的商王朝，一般认为是不断膨胀，扩大的势力。诚然，殷墟（大邑商）在不断扩大的过程中似乎越来越明显，但是王朝是否一直安泰？随后就突然被周族所灭？本文将从西北冈王陵区的王陵出土的遗物，以及其他的状况来探讨商王朝的实际情况。

2. 西北冈王陵出土遗物的变迁

(1) 王墓的比定（图 1）

内田纯子和沟口孝司基于西北冈王陵区的王墓中出土的骨柶和青铜器的型式变化，确定了王墓的顺序，并且推定了相应的王名²。众所周知，妇好是商王朝最繁盛的时期武丁的配偶。而且，HPKM1400、以及位于正南方出土司母戊鼎的 84AWBM260 号墓的出土遗物，与妇好墓的时期一致，由此推断分别是武丁、妣戊之墓。根据上述的推断，将历代商王的顺序与王墓的早晚顺序进行了比定。

(2) 骨柶的退化和工匠群体的缩小（图 2）

鞋拔形的骨柶，主要是用动物的肋骨制作的器物。在骨柶的柄端处，用勾画、雕刻、镶嵌进行装饰的骨柶，现在的考古发现来看仅在西北冈王陵出土，应该是仅为王族所持有的器物。HPKM1001 的骨柶，纹饰主题丰富，具有多样的设计和雕刻手法，制作十分精美。由于雕刻手法和设计上存在差异，应该是由不同的工匠群体负责制作。与此相对的，相当于殷墟二期的墓葬所出土的骨柶，纹饰为固定的 2 种，雕刻较浅，刻痕也有增加，有朝向平面化的变化趋势。到殷墟三~四期，出现了平面化、以及只雕刻轮廓的设计，即使是与前一阶段相同的设计，但是同时也发生立体雕刻逐渐消失的变化，特别是殷墟三期的 HPKM1003 以后有明显的退化现象。综上所述，可能是负责制作王墓骨柶的工匠，在技术水平和创造力上有逐渐下降的情形。

(3) 玉器（图 4）

殷墟早期的玉璧有有领和无领两种。玉石的颜色不同，而且研磨痕迹也不同，应该是制作技法具有差异。其中，主要为象牙色的有领玉璧，从现今的考古发现来看在 HPKM1443 之前没有随葬的现象。笔者认为盘庚迁都以后才传到殷墟来的。HPKM1443 和小屯丙一基坛下层出土的玉璧，出土了象牙色有领玉璧和绿色无领玉璧。在这一时期，可以知道刻意地使用两种不同的玉璧。而且，这两种玉璧的制作痕迹，玉材以及制作方法都不同。荆志淳、唐际根等认为有领玉璧是从南方传入的³。但是殷墟三期的 HPKM1003 以后，象牙色有领玉璧逐渐消失，

1 夏商周断代工程专家组：《夏商周断代工程 1996-2000 年阶段成果报告》，北京：世界图书出版公司，2000 年。

2 Koji Mizoguchi&Junko Uchida, The Anyang Xibeigang royal tombs revisited: a social archaeological approach. *Antiquity* (June, 2018), p. 709-723, 2018.

3 荆志淳、徐广德、何毓灵、唐际根：《M54 出土玉器的地质考古学研究》，中国社会科学院考古研究所编《安

HPKM1500 号墓和 HPKM1217 号墓中出土了蛇纹石制的「假玉」的玉璧。这可能是由于商王朝所持有的玉材枯竭，商王朝的权威急剧下降所致。

(4) 大理石制品 (图 3)

小屯宫殿区丙区 YM331 号墓出土了后石家河文化的神面玉像，在乙区的出土物中，也发现与后石家河文化玉像设计相似的大理石神面饰。其表面的纹饰以凸线和立体浮雕状的雕刻所表现。HPKM1001 等所出土的殷墟初始期的大理石制品，有同样的凸线雕刻，可能是吸收了后石家河文化的雕刻技术。HPKM1001 中发现了大理石制的虎像，而且与该虎像具有相同形态的器物，在 HPKM1550 中也有发现。但是，其雕刻工艺和石材品质明显逊色不少。在这之后的大墓中出土的大理石制品，总体上尺寸有小型化的趋势，造型也更单纯。其共通性在于单纯的凹线雕刻，整体设计可以说是逐渐简化的倾向。

(5) 青铜器

青铜礼器出土的大墓仅有 HPKM1001、HPKM1550、HPKM1400、HPKM1004、HPKM1003。其他的大墓可能是由于被盗扰，没有发现青铜礼器。众所周知，HPKM1001 出土了 3 件大型盃（现藏于根津美术馆）以及数件普通尺寸的青铜礼器。同时，根据其他武器的尺寸和装饰也可以发现，不难想象随葬了与之相类似的大型器物。从位于 HPKM1400 的正南方的 M260 中出土了司母戊鼎。与该器物同一时期，即相当于殷墟二期的大型青铜礼器，散见于收藏资料中。因此，这些收藏资料也许属于 HPKM1400 的出土器物。

从 HPKM1004 中出土了牛鼎和鹿鼎。像这样大型的其他的青铜彝器也应该有随葬物。HPKM1003 中出土了镶嵌绿松石的方尊残片。虽然只是很小的一部分，但是也可以了解到，现今已佚失的镶嵌绿松石大型青铜彝器，出现于殷墟三期，并且是随葬于王墓的珍贵的出土资料。另一方面，与 HPKM1001、HPKM1400、HPKM1004 的大型青铜器相匹敌的殷墟三~四期的大型青铜器，在世界范围的收藏资料中都十分稀少。因此，较难推测王墓随葬的实际情况。

(6) 青铜器的种类变化 (图 5)

青铜器的变化不仅限于王墓，关于殷墟青铜器整体的时间脉络，在此稍作论述。

笔者推测，二里头时期开始的青铜彝器，首先，为了将酒加热，爵和斝的制作因此较为发达，宫本一夫⁴，冈村秀典⁵等学者认为这些礼器是因应（夏）商王朝的“礼制”所制作，正如小南一郎⁶所言，可能是加热“醴（酒酿）”后，共同饮用的仪式⁷。醴酒作为一种嗜好型饮料，通常是加热或者冷却后饮用。在二里头时期，爵和斝表面施加饕餮纹，与新出现的盛酒器尊，加上饮酒器觚，制定了用醴酒举行仪式的一系列道具。这一系列的器种上施加了最神圣的纹饰——“饕餮纹”，这种纹饰可能是一种与醴酒相关的神像。醴酒的酒精度数较低，无法长期保存。而尊的口沿向外张开，应该不是用于保存醴酒的容器。但是，从二里岗上层文化期开始，出现了有盖且颈部为束颈的卣。卣也并不是用来保存醴酒，而是用来保存酒精度高的酒的容器。在这样的背景下，对相当于王墓和王族的妇好墓的随葬品来看的话，殷墟二期时，可以认为用于醴酒仪式的饕餮纹青铜器最受重视。而且，殷墟一期的青铜器上附着有煤，且爵和斝残留温

阳殷墟花园庄东地商代墓葬》，p. 345-387，北京：科学出版社，2007 年。

4 宫本一夫：《中国の歴史 01 神話から歴史へ》，p. 311-316，東京：講談社，2005 年。

5 冈村秀典：《中国文明—農業と礼制の考古学》，p. 93-97，京都：京都大学学術出版会，2008 年。

6 小南一郎：《飲酒禮と裸禮》，《中国の禮制と禮学》，京都：朋友出版社，2001 年。

7 内田純子：《商代の酒器と青銅礼器》（陳光祖主编《金玉交輝：商周考古藝術與文化論文集》，p. 69-92，台北：中央研究院歷史語言研究所，2013 年。

酒痕迹。与此相对的，卣的数量逐渐增加。殷墟三期以后，各式各样的卣变得越来越多⁸。殷墟期的最初阶段，卣的纹饰并没有施加饕餮纹。但是，殷墟三期以后却施加了饕餮纹，这表明醴酒仪式用的彝器理念逐渐被忘却。用卣作为替代，爵觚除外，原本醴酒仪式不可或缺的尊和斝的数量逐渐减少。

综上所述，这可也许反映出以醴酒仪式为中心的礼制有逐渐崩坏的趋势。爵和觚在殷墟氏族墓地中的中小型墓葬里也有发现，应该是作为象征威信的器具持续残存了下来。而从存世收藏品来看，相当于殷墟后半期的尊等这类大型器数量则出现急剧减少的现象，可能不单单是因为被盗而丢失，也许也代表了醴酒仪式本身的衰退。

(7) 关于王墓中随葬品的衰落

由于大部分王墓都遭受严重被盗，出土遗物也极为有限。但是，结合现存遗物的数据来看，即便试图复原，也无法提升这些王墓陪葬品的品质和数量。不如说，正如骨器和玉器的发展情形，技术水平和多样化逐渐降低。玉材的枯竭，使得殷墟二期为止供应稳定的南方玉器逐渐减少。以殷墟二期为界，可以窥见其衰落的状况。这一现象与接下来的章节将要论述的几个事项同样具有关联性。

3. 华中地区的文化

1986年发现两个祭祀坑，是以青铜神像为首的青铜器、玉器等而受到瞩目的三星堆遗址，也出土了笔者所说的“华中型青铜器”。通过2020年再次的发掘调查，发现了新的六个祭祀坑。笔者推定以尊为主的典型华中型青铜器相当于殷墟二期⁹。之后，却在三星堆遗址中突然断绝。另一方面，以江西省新干大洋洲遗址为代表的吴城文化，也是在殷墟二期时曾一度衰落，相当于殷墟四期末的吴城文化三期再度兴盛起来¹⁰。新干大洋洲遗址的青铜器，其特征相当于殷墟一~二期，不仅可以认为与殷墟二期为止的殷墟文化有着密切的交流，同时高度繁荣的文化突然衰退这一点，也是与三星堆遗址相同的特点。

通过青铜器所含的铅同位素比的分析，可以确定四川省和云南省附近所产出的高放射成因铅，也出现在中原的青铜器之中。但是以殷墟二期为界的殷墟青铜器含有高放射成因铅的含量骤减，并且在殷墟四期的殷墟青铜器上消失殆尽¹¹。由此可以推测，以三星堆遗址为中心与四川省的交易，在殷墟二期时已经结束。

考虑到上述各种现象，可以推测在殷墟二期时可能由于发生了某种重大的事件，使得殷墟与南方的交易突然断绝，或者说是衰落。而且，殷墟王墓随葬品在殷墟二期出现衰落的迹象，恐怕也与这种现象有关。

4. 古代文献的记载

8 岳洪彬：《殷墟青铜礼器研究》，中国社会科学博士论文文库、北京：中国社会科学出版社，2000年。

9 难波纯子（向桃初译）：〈华中型青铜彝器的发达〉，《南方文物》2000年第3期；苏荣誉、李建毛：《华容大口折肩青铜器研究—兼及挂饰管形牺首诸器》，《美术研究》2017年第1期。

10 江西省文物考古研究所、樟树市博物馆：《吴城1973-2002年考古发掘报告》，p.407-410，北京：科学出版社，2005年。

11 金正耀、W. T. Chase、平尾良光、马渊久夫、杨锡璋、三轮嘉六：〈中国两河流域青铜文明之间的联系—以出土商青铜器的铅同位素比值研究结果为考察中心〉，《中国商文化国际学术讨论会论文集》，p.425-433。北京：中国大百科全书出版社，1998年。

《古本竹书纪年》和《史记》中，记载了有关于殷墟晚期各王治世的文献。在《史记》中的记载了较多关于武丁时期的繁盛情形，而《竹书纪年》由于失传，记载较少。其中，最引人注意的是武乙以后的记载增加，比如说“武乙即位，居殷。武乙三十五年，周王季伐西落鬼戎，俘二十翟王。”等，对周人的活动的记载变多。恐怕，这一时期开始，文武丁、帝乙对周人的记载都有所增加，这表明周人已经意识到商王朝的存在，此时周人进行活跃的行动。南方的长江流域的器物在殷墟三期以后不再流入，由此可以推测，商王朝与黄河流域东西两侧居民的交流和活动日益频繁，这与甲骨卜辞中，关于上述地区冲突的记述日益增多的现象也十分吻合。另一方面，笔者推测为武乙和文武丁王墓的 HPKM1500 和 HPKM1217 中，随葬品内容贫乏的可能性很高，这两座墓的墓道设计很长，或许是为了夸耀墓主身份的权威性？

5. 结语——殷墟二期南方文化突然衰退的原因

以殷墟二期为界，传统的酒器之所以逐渐衰退，可以认为是由于醴酒仪式的衰微，此时已能够普遍使用酒精度高的酒。但是，长江流域繁盛的地方文化在一时之间也存在衰退的现象，因此笔者推测，其原因可能是醴酒的原料大米没有流入所致。而且，该现象与铜和铅等青铜原材料断绝，以及南方玉璧不再流入的情形也相吻合。因此，长江流域的地方文化突然衰退的原因的一种可能性，也许与气候变迁相关。

气候变迁对人类社会也有很大影响，也持续影响着现今的世界。1993 年，日本因火山爆发而出现暂时降温的现象，当时导致大米短缺而成为严重的社会问题。Y. T. Hong 等人在 2004 年发表的关于 $\delta^{13}\text{C}$ 变动的论文中，由厄尔尼诺现象所导致的碳同位素的比率变化，推测了过去 12000 年间的气候变化的情况¹²。据此可以推测，在公元前 1200 年左右，由于气候迅速变化，温度一度变冷。因此气候变迁对于商代社会突如其来的文化衰亡与社会变动情形，在今后也有必要进行更深的探讨。

商王朝通常给人国力稳定的印象。但是，从殷墟各遗存和遗物的发现来看，我们认为殷墟绝不是一直以来都是稳定发展的国家，事实上各种因素相互作用，使该文化产生了许多变化。在大邑商持续发展和繁荣的景象背后，王朝权威的衰落，朝向殷周革命的方向迈进也许是必然的。在持续发掘殷墟各种遗存的基础上，希望能仔细地探讨这种变化。

12 Y.T.Hong, B.Hong, Q.H.Lin, Yasuyuki Shibata, Masashi Hirota, Y.H.Xhu, X.T.Leng, Y.Wang, H.Wang, L.Yi, Inverse Phase oscillations between the East Asian and Indian Ocean summer monsoons during the last 12,000 years and paleo-El Niño, *Earth and Planetary Science Letters* 231, p337-346, 2005.

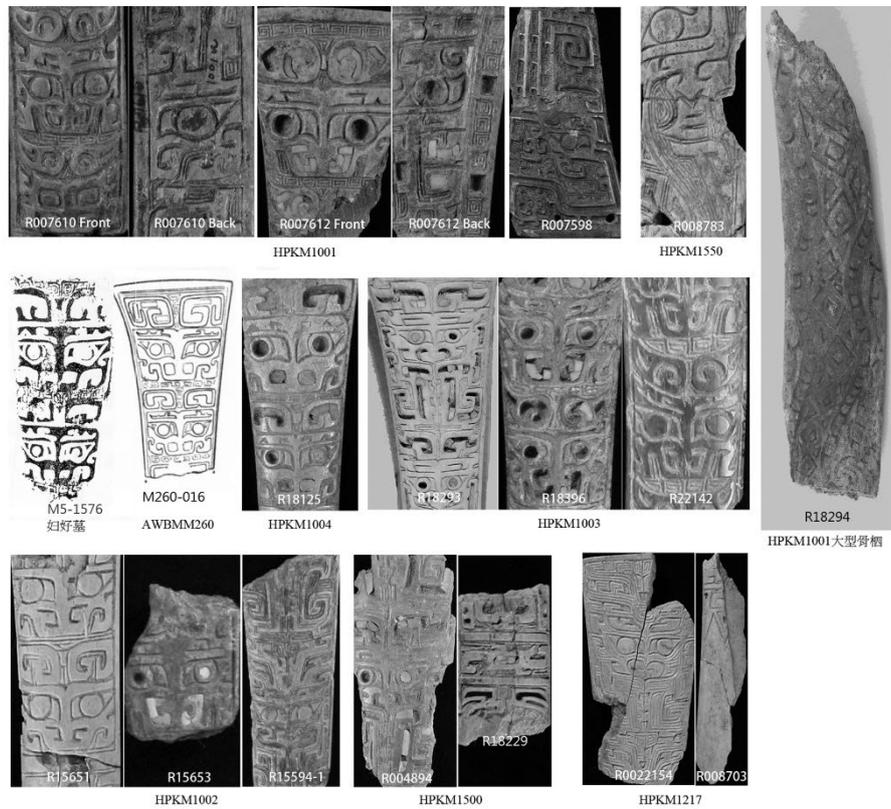


図2 諸王陵出土の骨柶



図3 大理石製品の彫刻技法

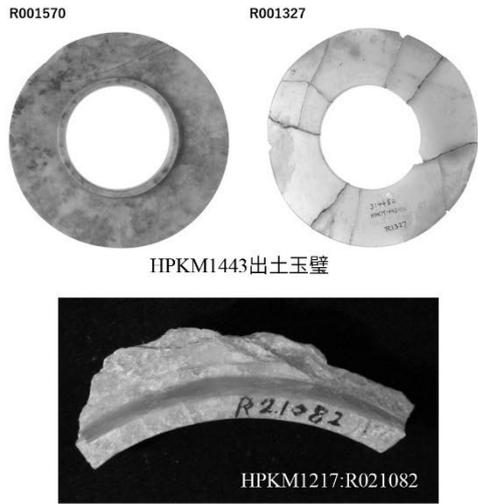


図4 玉器の退化

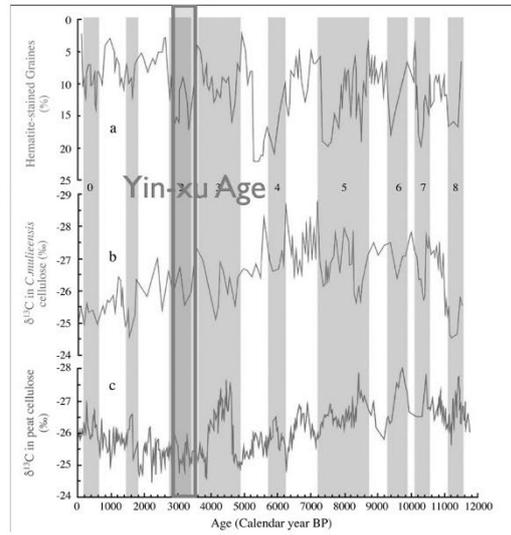


図6 気候変動 (Hong等2004より)



図5 青銅酒器セット (二里岡期)

商代後期の社会・文化とその変化

発行 2022年3月20日

編集 〒819-0395 福岡市西区元岡744

九州大学大学院人文科学研究院

宮本 一夫

発行 九州大学 アジア・オセアニア研究教育機構

印刷 有限会社九州コンピュータ印刷

〒815-0035 福岡県福岡市南区向野1丁目19-1

電話 092-553-6161